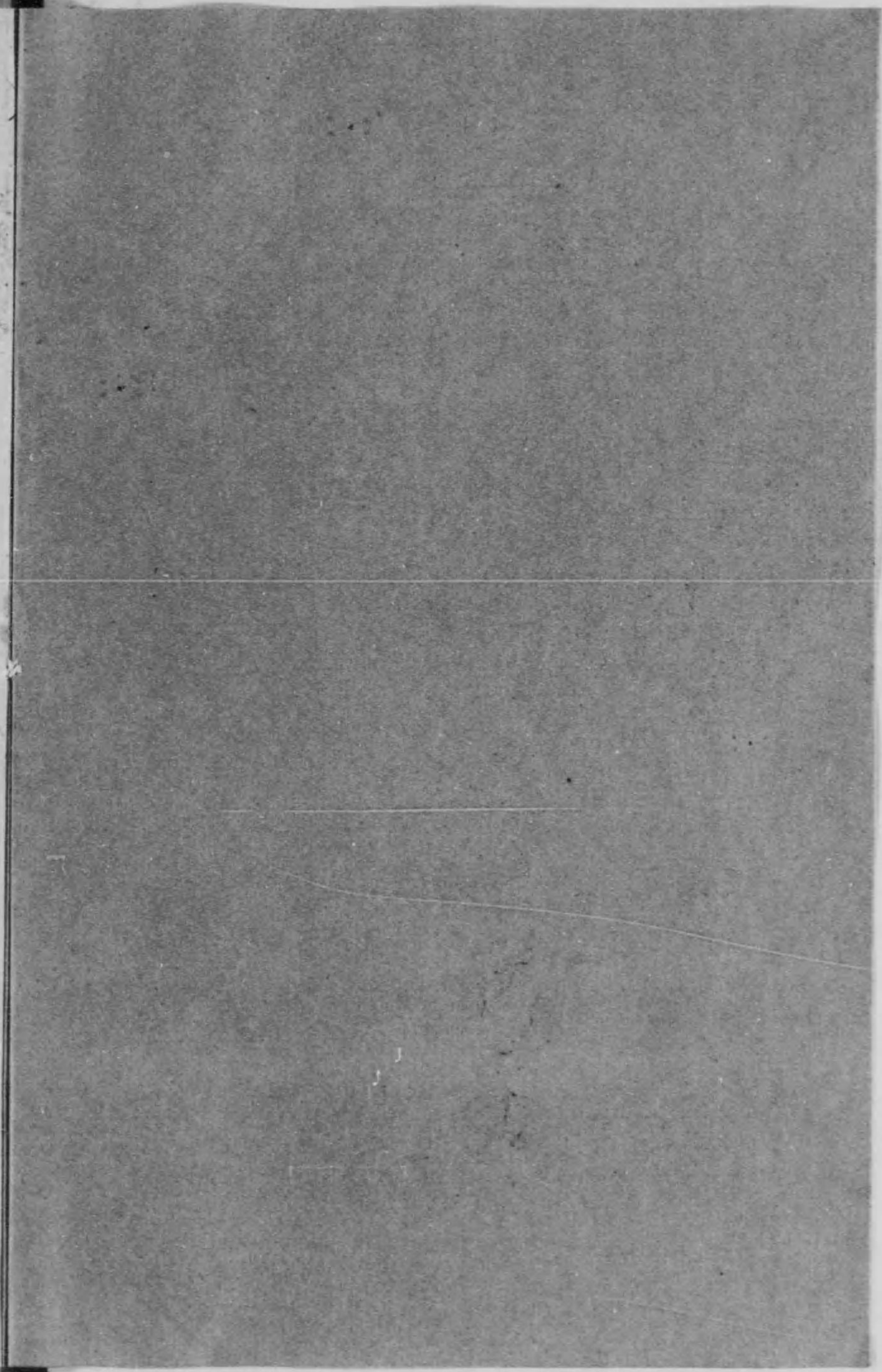


913.45
SH21
1



始





91345
SH21
(1)



新譯平家物語 上卷

澁川右年

大正
3. 9. 25
内交

此本を書くに就き

■此の本を書くことに爲つたのは與謝野寛氏及夫人晶子女史の慫慂に因る。三十一年來にないといふ今年の夏の眞盛り、日比谷の假寓の狭苦しい書齋に於て、業を始めたのであつた。

■平家物語を現代語に譯する必要が有らうか。必要があるとするれば中學二三年以下の少年であらう、其なればお伽噺に少し色の附いたぐらゐに書けば好からうと考へた。

■併しいよ／＼着手して見ると面白半分に讀んでゐたとき思つたほど容易いものではなかつた氣も止めずに看過した所に案外難解な點がある。さすれば吾等ぐらゐの者お伽噺の愛讀者より今少し程度の高い人の爲にも譯本を提供する餘地があると考へられる。そこで本書の如き體裁のものとした。

■先づ若干の異本を集め、次に註釋本を集めた。彼此比較した末に、底本として有朋館文庫の本を採つた。長門本に依つて取捨した所が大部ある、全く獨斷を以

此本を書くに就き

て加除した點も少くない。

■平家物語抄、平家物語考證に摘出してある本文に付き其全本を想像すると今の普通本とは餘程相違がある様である。長門本は更に非常に違つてゐる。平家物語は一時代一人の筆でないといふ古人の説は當つてゐる様である。源氏物語や枕草紙、太平記や徒然草に異本は在つても其相違は平家の異本の如く甚だしくない。傳寫の誤りで斯うまで違ふ筈は無い。故意に加除されたものでなければならぬ。

■平家物語は琵琶に上せて語られたものである。最初は甚麼か知らぬが、或時代から盲法師に親まれたものである。此の語られ又は謠はれるといふことが即ち異本の相違を甚だしからしめた原因であらう。

■長門本には項目が多い。長門本に存して普通本には缺けてゐる項目は概して面白味の少ないものである。同一項目に就いて檢するに、長門本に無くて普通本に殖えてゐる所の文句が屢々有る。

■之を考へると長門本の方が平家物語の原形に近いのであらう。歌詞と音譜

の關係に於て、平曲が若し琴曲の様なものであれば容易に原作を加除することは出来ないが、語り物は随意に文句の増減が出来る。浪花節が同じ師匠から教はつた弟子の間で、少して、文句が違ふ様なものである。

■其から又普通本では突如として書き出され意味の取れない處が長門本に依つて見ると其前の叙述に依つて意味明白なことがある。是亦普通本が原作に遠くして長門本が原本に近いといふ證據の一である。

■此んな事を考へて大分長門本を尊重した。併し何本にもせよ平家物語は歴史としての價値が少いといふ事は先輩の研究に依つて論定されてゐる。史の史料の考證はさて置いて、平家物語中に矛盾した記事が幾何もある。初めは餘り酷い處は訂正して置かうと思つたが、後には成るべく其のまゝにしておくのが譯本の義務だと思ひ直したで、訂正した所は少部分に止まつた。

■故事の引用にも平家物語は誤りが多い、作者が記憶のまゝに用ゐたものらしい。新譯の際、出典を調べて餘り甚だしい數ヶ處は訂正した。併し全然誤謬で訂正の爲よりの無い個處は其のまゝに置くか、又は全く削つた。

此本を書くに就き

此本を書くに就き

■現代語で譯されぬ名詞は、難解であつても元のまゝに用ゐる外は無、大概服装器具の名稱である。今日の戦記に速射砲機關砲探照燈地雷火カーキ色の軍装、白色桐葉章などあるのを、鎌倉時代平安朝時代の文に譯して別な言葉に改めやうのないのと同じく、直衣水干、緋威の鎧、滋藤の弓、蓼目、鏑矢の類は、其のまゝに用ゐるの外は無。併し腹巻と鎧とは違つても、今日の言葉では共に鎧といふ護身装具であるから、腹巻をも鎧と譯本には改めた場合がある。腹巻の上に鎧を着ける場合には、已むを得ず兩語共昔のまゝに襲用しておいた。

■對話は、餘り現代の口語になり過ぎては却つて好くないと考へて、少しばかり古色を存しておいた。尊い人の言葉ほど古色を増し、神佛の言葉の如きに至つては全く原文の儘に存したのもある。今日でも莊重に言ふ場合ほど文語を多く用ゐる様であるから斯うした方が好からうと思つた。

■字音は成るべく今日の普通な發音に従つた、女御、讀經など、假名を附けた。併し昔し風にした所もある。涙を流す、泣く、袂を絞るなどいふ文句の多いのに困つた支那流に誇張したもので其實は困つた愁へた、悲んだといふ位の場

合が多い様である。

■謠ふのを聞いてゐるときは、片はしから消えて行くから、一句一句が面白ければ好い、其の故か前後聯絡の無い文句が濫用されてゐる。併し文章として通覽するときは誠に不都合なものになる。到底一句／＼を譯すわけに行かない。普通に平家が面白がられる文句は、此の不都合な部分の様である。其が譯されぬのだから長唄や謠曲が譯して面白くないと同じく、此の譯本も亦面白くあるまい。

■併し平家物語の面白い點は例の美辭麗句のみではない、事實として面白い部分分が澤山ある。世界に一特色を爲せる日本の武士道に、源平武士の感化は甚だ深い。讀み物として語り物として我等の祖先に親まれた平家物語は新譯本として、尙ほ長く我等の子弟に與ふる價値が有るとおもふ。

大正三年九月 膠州灣觀戰に赴く支度最中此の書の校正を畢る。

澁川 玄 耳

此本を書くに就き

此本の出来るには坂元雪
鳥氏及び藤川淡水氏とに
大變手敷を掛けた謹んで
其好意を謝する。

新 平家物語上巻目録

卷 一

祇園精舎

▽平家の系統

殿上間討

▽平忠盛の昇殿▽間討の計畫▽左兵衛尉家貞▽伊勢瓶子▽證據の木刀

鱧

▽忠盛の和歌▽清盛の相續▽鱧の瑞光

禿童

▽清盛の出家▽時忠の慢言▽平家の權勢▽三百人の童

我身榮花

▽一門の繁盛▽建禮門院▽准三后▽平家知行の國▽門前市をなす

上巻目録

○ 妓王

▽妓王清盛に愛せらる▽佛御前の推参▽佛御前の歌舞▽妓王の放逐▽佛
と凡夫の歌▽母子三人尼となる▽嵯峨の山奥▽佛御前の遁世

○ 二代の后

▽天下第一の美人▽御入内▽麗景殿▽御述懐の御歌

額打論

▽天皇崩御▽大衆の狼藉▽観音房勢至房

清水炎上

▽會稽の恥を雪ぐ▽重盛の諫言▽西光法師▽改元▽平關白

殿下乗合

▽一院御出家▽資盛の鷹狩▽藤原基房資盛に恥辱を與ふ▽基房復讐さる
▽重盛資盛を放逐す

○ 鹿谷

▽清盛の姪女御となる▽左大將の候補争ひ▽新大納言成親の修法▽俊寛

○ 鶴川合戦

僧部の山庄▽平家追討の密謀▽康頼の猿樂

願立

▽重盛内大臣となる▽加賀の目代▽師經の狼藉▽白山の大衆怒る▽山門
の訴訟

御輿振

▽賀茂川の水雙六の役山法師▽藤原師道を咒咀す▽師道の母麗子の日曆
社参籠▽御託宣▽法華問答講▽師道薨去

内裏炎上

▽大衆神輿を振つて入洛す▽源三位頼政大衆を説く▽平軍神輿を射る▽
大衆退散

公卿會議

▽公卿會議▽天皇御避難▽時忠の頓智▽師經獄に下さる▽京都の大火▽
大極殿焼失す

卷

二

座主流

▽明雲大僧正座主を辭す▽先座主遠流に決す▽根本中堂の咒眼▽一心三
裂の血脈▽十禪師權現の御託宣▽大衆先座主を奪ふ▽怒房子怒房

五九

一行阿闍梨

▽先座主妙光坊に入る▽果羅國▽九曜の曼陀羅

六八

西光斬らる

西光法師の奏聞▽多田藏人の内通▽西八條の勢揃▽謀叛人召捕▽新大納
言捕へらる▽西光法師を斬る

六九

小教訓

▽新大納言責めらる▽新大納言と重盛との會見▽重盛父清盛を諫む▽雲
林院▽江相公の筆の跡

七七

少將乞請

▽丹波少將成經▽宰相邸の袂別▽教盛の歎願▽成經教盛に預けらる

八六

教訓

.....

九三

烽火

胸板の金物▽重盛の誠忠

九九

新大納言流さる

▽重盛兵を集む▽周の幽王▽褒姒

一〇三

阿古屋松

▽新大言備前に流さる▽重盛の書面

一〇七

新大納言死去

▽大宮流罪▽實方中將▽腹赤の使者

一一一

徳大寺殿島詣

▽鬼界が島▽源左衛門尉信俊▽有木の別所▽新大納言殺さる▽天人の玉哀
▽藤藏人大夫重兼▽月夜の進言▽殿島の内侍▽清盛謀らる▽徳大寺實定
左大將となる

一一六

山門滅亡

▽法皇三井寺にて御受戒▽山門の堂衆學生と戦ふ▽清盛大衆と共に山門

一二〇

上巻目録

を焼く▽僧坊の落首

善光寺炎上

▽三國無雙の靈像▽善光寺如來と本田善光▽王法末期の先表

康頼祝詞

▽康頼出家▽熊野詣の眞似事▽三所権現御前の祝詞

卒都婆流

▽夢中の美人▽指の葉の歌▽千本の卒都婆▽嚴島神社前の落▽卒都婆
漂著▽卒都婆淑覽

蘇武

▽李少卿▽蘇武の片足▽雁書雁札の由來▽十九年間の孤忠

卷三

敕文

▽彗星現はる▽中宮御懷妊▽皇子御誕生の祈誓▽讀岐院の御靈▽贈官贈
位行はる▽敕文書の御使鬼界が島へ向ふ



足摺

▽丹左衛門尉基康▽成經康頼敕されて歸る▽俊寛の失望

御産卷

▽六波羅池殿の御産所▽御難産▽清盛夫婦の心痛▽法皇御祈禱▽皇子御
誕生▽桑の弓蓬の矢

公卿揃

▽帥典侍殿▽飯の古例▽千度の御被△掃部頭時晴▽御安産の御祝詞

大塔建立

▽高野の大塔修理▽老僧清盛を説く▽東曼陀羅西曼陀羅▽嚴島の修理▽
小長刀▽大明神の御託宣

頼豪

▽賢子の中宮▽頼豪の祈禱▽江帥大江匡房▽持佛堂▽頼豪餓死▽敕文親
王薨去▽堀川天皇御誕生

少將都還

上巻目録

▽成経康頼有木の別所を訪ふ▽結願の大卒都婆▽洲濱殿▽久振の對面▽東山雙林寺▽寶物集

有王島下

▽有王鬼界が島へ向ふ▽蜻蛉の如き人▽俊寛卒倒す▽俊寛斷食して死す▽俊寛の姫尼さなる▽有王出家

臆

▽京中の大旋風▽神祇官の御占

醫師問答

▽重盛の熊野詣▽證誠殿前の祈願▽岩田川の奇瑞▽重盛重病▽宋朝の名醫▽五十斤の金▽重盛逝去▽宗盛派の歡喜

無文沙汰

▽重盛の夢▽妹尾太郎兼康▽維盛に無文の太刀を與ふ

燈籠

▽四十八間の精舎▽二百八十八人の美人▽燈籠の大臣

金渡

▽船頭妙典▽黄金三千五百兩▽宋の育玉山

法印問答

▽大地震▽陰陽頭安倍泰親▽清盛朝廷を恨む▽靜憲法印勅使として清盛邸に赴く

大臣流罪

▽大官四十三人の流罪▽藤原基通大臣關白さなる▽藤原師長熱田社前にて琵琶を彈す

行隆沙汰

▽江大夫判官遠成父子▽前左少辨行隆復官

法皇御遷幸

▽法皇鳥羽の北殿へ御幸▽紀伊二位▽大膳大夫信成奉公▽靜憲法印參上▽六條院崩去

城南離宮

上巻目録

▽主上の御書▽法皇の御返書▽明雲大僧正再び比叡山の座主となる

卷四

▽嚴島御幸.....一九七

▽春宮御踐祚▽清盛夫婦准三后の宣旨を蒙る▽嚴島御幸の御門出▽主上
法皇の御對面▽鳥羽の草津

還御.....二〇〇

▽嚴島御逗留▽隆房少將の歌▽備後國數名の泊▽藤の花の歌▽福原御返
留▽紫宸殿の御即位

源氏捕.....二〇四

▽高倉宮以仁王▽源三位賴政以仁王を説き奉る▽以仁令旨を賜ふ▽熊野
別當湛増▽新宮合戦△湛増敗北

舳沙汰.....二〇八

▽鳥羽殿の馳▽泰親の勘狀▽美福門院の御所▽湛増の註進▽以仁王を捕
へんさす

信連合戦.....二一〇

▽源三位の急使▽長谷部信連▽以仁王女装して三井寺へ入らせ給ふ▽御
笛小枝▽信連勇戦▽信連伯耆へ流さる▽鎌倉殿の恩賞

高倉宮園城寺入御.....二一六

▽如意山▽法輪院

競.....二一六

▽伊豆守仲綱の愛馬木の下▽宗盛木の下を所望す▽仲綱の鐵焼▽源三位
の決心▽八尺餘の蛇▽還城樂△渡邊源三競漣口▽宗盛の愛馬南録▽昔は
南録今は平宗盛入道

山門牒狀.....二二四

▽三井寺の大衆會議▽大衆比叡山を説く

南都牒狀.....二二五

▽山門の大衆怒る▽清盛の謀▽落首▽三井寺の大衆興福寺を説く

南都返牒.....二二七

上巻目録

▽興福寺の大衆三井寺に同心す

大衆揃.....二二九

▽六波羅夜討の評定△大軍六波羅へ向ふ△逢坂の關▽夜討中止▽一如房の註進▽以仁王南部落△蟬折ミ小枝▽乘圓房阿闍梨慶秀

橋合戦.....二二四

▽六度の御落馬▽宇治の平等院▽平家の討手▽宇治橋合戦▽矢切り但馬▽筒井淨妙明秀▽一來法師討死▽淨妙房の矢疵▽足利又太郎先登

宮御最後.....二四二

▽伊豆守の歌▽源大夫判官兼綱討死▽伊豆守仲綱自害▽源三位頼政の首▽以仁王討たれ給ふ▽南都の大衆落膽す

若宮御出家.....二四五

▽平家の凱陣▽典藥頭定成▽八條女院▽以仁王の若宮姫宮▽池中納言頼盛▽三位局▽宗盛の御命乞▽安井宮大僧正導尊▽木曾が宮▽源茂仁

鴛.....二五〇

▽頼政述懐の歌▽近衛院の御惱▽猪早太▽頼政怪獸を射る▽宇治左大臣▽頼政鶴を射る▽伊豆國を賜はる

三井寺炎上.....二五五

▽平家の三井寺攻▽三井寺焼失▽堂衆流さる

卷五

都遷.....二五七

▽福原へ御幸▽牢の御所▽將軍塚▽古都の頽廢

新都.....二六二

▽皇居の地を相す▽御所造營

月見.....二六一

▽新都の事始▽徳大寺大將の上洛▽近衛河原の大宮▽待宵の小侍従▽物かはの藏人

怪物.....二六五

▽岡の御所の怪▽馬の尾に鼠の巢▽節刀の怪夢▽小長刀の紛失

上巻目録

大庭早馬

▽宰相入道成頼▽大庭景親の註進▽頼朝の旗上▽石橋山の戦▽衣笠城

朝敵捕

▽前兵衛佐頼朝▽朝敵の濫觴▽五位の鸞

咸陽宮

▽燕の太子丹▽田光先生▽荆軻▽秦の始皇

文覚荒行

▽姪小島▽遠藤武者盛遠の出家▽二十一日間の荒行▽金迦羅制多伽の二童子▽文覚の諸國修行

勸進帳

▽高雄の神護寺▽文覚法住寺殿へ推参す

文覚流さる

▽法皇の御遊▽文覚の狼藉△安藤武者文覚を捕ふ▽清水の観音坊▽文覚

風波を静む

伊豆院宣

▽奈古屋の奥▽義朝の觸腰▽文覚福原へ赴く▽前右兵衛督光能卿▽法皇院宣を賜ふ

富士川

▽福原の公卿會議▽關東征伐▽大將軍維盛薩摩守忠度▽上總守忠清▽齋藤別當實盛▽東西兵の比較▽富士川の水鳥▽平家の遁走

五節沙汰

▽維盛右近衛中將となる▽主上御遷幸▽五節の起源

都遷

▽新院の御憐▽御幸と行幸▽近江源氏背く

奈良炎上

▽清盛の首▽猿澤の池▽頭中將重衡奈良に向ふ▽坂田耶永覺▽般若寺▽大佛寺の二階▽東大寺興福寺焼亡

卷六

新院崩御.....三二三

▽朝賀廢止▽御齋會▽初音の僧正▽新院六波羅池殿にて崩御▽澄憲法印
と女房との歌

紅葉.....三二六

▽紅葉山▽紅葉を焼いて酒を煖む▽高倉天皇の仁慈

葵前.....三一八

▽少女君龍を被る▽冷泉少將隆房▽鄭仁基が姫

小督.....三二〇

▽禁中第一の美人▽隆房と小督▽清盛小督を憎む▽小督内裏を出づ▽彈
正大弼仲國▽嵯峨野の奥▽想夫戀の曲▽小督の物語▽仲國小督を伴ふ▽
小督の出家▽法皇の御歎悲▽諒闇

廻文.....三二九

▽木曾義仲の生立▽木曾仲三兼遠▽義仲兵を募る

飛脚到來.....三三二

▽城太郎助長兄弟▽河内源氏背く▽諸國の謀叛類に起る

入道逝去.....三三四

▽宗盛の出陣▽清盛の熱病▽二位階の悪夢▽清盛逝去す▽圓實法眼

經島.....三三八

▽西八條邸焼く▽天狗の所爲▽經島の由來

慈心坊.....三四〇

▽慈悲僧正▽圓寬廳の大供養▽慈心坊大供養に列す▽作善の文箱▽圓寬
の偶▽慈心坊律師となる

祇園女御.....三四五

▽白河院の寵姫▽忍びの御幸▽雨中の怪物▽忠盛の手柄▽女御を忠盛に
賜ふ▽零餘子の歌▽白河院の御製▽清盛元服

洲股合戦.....三四八

▽宗盛院參▽法皇還幸△大佛殿の事始▽左少辨行隆の靈夢▽源氏尾張に

上巻目録

攻上る▽十郎藏人行家▽東國源氏に従ふ

喘涸聲……………三五二

▽虚空の怪聲▽城太郎助長變死▽大赦▽按察大納言資方卿▽木曾路川の
今様

横田河原合戦……………三五三

▽大仁王會▽五壇の法▽實支阿闍梨平氏を調伏す▽中宮院號を蒙らせ給
ふ▽法皇日吉社へ御幸▽城四郎長茂の木曾攻▽宗盛内大臣となる▽諸國
皆平家に背く

卷七

北國下向……………三五九

▽頼朝義仲を攻む▽清水冠者▽平家の大軍木曾に向ふ

竹生島詣……………三六一

▽皇后宮亮經正の風流▽辨天社前に白龍現す▽經正の歌

燈合戦……………三六三

▽義仲防戦の準備をなす▽平泉寺長吏齋明威義師の裏切▽磯並山

木曾願書……………三六五

▽埴生の陣▽八幡社前の祈願▽大夫房覺明▽山鳩來つて白旗の上に舞ふ

俱利伽羅落……………三六九

▽源平の對陣▽俱利伽羅谷の血戦▽平泉寺長吏斬らる▽奥の秀衡名馬を
義仲に贈る▽氷見湊▽大將軍知教討死

篠原合戦……………三七二

▽義仲神領を寄進す▽齋藤實盛の陣屋▽高橋判官討たる▽武藏三郎左衛
門有國の立往生

實盛最後……………三七五

▽實盛の奮戦▽錦の直垂▽實盛の首實檢▽樋口次部兼光の物語

玄昉……………三七九

▽上總守忠清飛彈守景家の嘆き死▽藤原廣嗣▽玄昉の獨躰▽頭墓▽鏡宮

上巻目録

木曾山門牒状 三八一

▽義仲比叡山の大家を説く

山門返牒 三八二

▽大衆會議▽大衆義仲に應ず

平家山門連署 三八四

▽一門連署の願書▽山王大師の御歌▽大衆平家の乞を拒絶す

主上都落 三八七

▽佐渡衛門尉重貞▽宗盛六波羅池殿に参上す▽女院の御悲歌▽法皇竊かに御所を出てさせらる▽四海へ行幸▽近衛基通卿▽童子の歌▽知足院

維盛都落 三九一

▽維盛の奥方▽六代御前▽寢覺の睦語▽訣別▽齋藤五齋藤六▽平家部に火を放つ

聖主臨幸 三九五

▽京都の荒廢▽重能等の釋放▽別離の涙

忠度都落 三九六

▽五條三位俊成卿▽薩摩守忠度▽忘形見の歌卷▽故郷の花の歌

經正都落 三九九

▽仁和寺▽御琵琶青山▽御室の御歌▽經正の返歌▽大納言法印行慶名残を惜む▽法印と經正の歌▽用意の赤旗

青山沙汰 四〇二

▽宇佐の勅使▽三面の琵琶▽大唐の琵琶博士廉承武▽上支石上の曲

一門都落 四〇四

▽池大納言頼盛の變心▽頼朝の誓狀▽仁和寺の常盤殿▽落行く平家の人
人▽教盛と經盛との歌▽肥後守貞能▽貞能重盛の墓を露く

福原落 四一〇

▽積悪の餘殃▽福原の舊里▽内裏を焼く▽一門四海へ落つ

新譯 平家物語上巻目録 終





祇園精舎

祇園精舎の鐘の聲。

諸行無常の響あり。

沙羅雙樹の花の色。

盛者必衰の理を顯はす。

奢れる者久しからず。

唯春の夜の夢の如し。

猛き人も遂に滅びぬ。

偏に風の前の塵に同じ。

祇園精舎

卷第一

146

そも、前の太政大臣平朝臣清盛は桓武天皇第五の皇子、一品式部卿葛原親王九代の後胤たる讃岐守正盛が孫にして、刑部卿忠盛朝臣の嫡男である。葛原親王の御子高親王は、無位無官でお逝れになつた。高親王の御子高望王の時初めて平の姓を賜つて臣籍に列し、世々武門の人と爲り、その子鎮守府將軍良望(後名國)より正盛まで六代の間、處々の地方官に任せられた。併し其のうち一人も昇殿を許された者はなかつた。

殿上の闇討

忠盛が備前守の時鳥羽院の御願により、三十三間の御堂を建て、一千一體の佛像を安置せられた天承元年三月十三日に、此の御堂即ち得長壽院落成の供養が行はれた。普請奉行であつた忠盛は、功勞に依り、但馬國を賜はり、且つ特別の御感賞として、是迄平家に例なき昇殿をも許された。その時忠盛は三十六歳であつた。公卿達の中には忠盛の此の榮譽を猜み憎んで、同年の十一月二十三日豊明の節會の夜に乗じて、忠盛を闇打しようといふ陰謀が企てられた。



此事が忠盛に漏れ聞えると、忠盛は苟くも武門の人たる者が犬死しては先祖にも相濟まぬ、君に對しても此際身を全うするのが忠義だと考へて、其夜わざと制規に外れた大刀を横たへて参内した。さて宮殿の小ぐらい所で、其刀を脱ぎ放つて、りゆうくと打振つた闇に閃めく電の物凄さ、人々は目を聳て、見て居つた。

忠盛の家來で左兵衛尉平の家貞と云ふ者は、此の夜禮服の下に鎧を着込み、太刀を携へて宮門深く進み入つて、御殿のお庭に控へてゐた。卑しい身分の入るまじき場所だから、係りの人が見とがめて、早速退去を嚴命した。家貞は固より覺悟の前であつた。

「主人備前守殿が、今夜闇打に逢はれる由を承はり、其先途を見届けに参つた者で御座る。」

と云つたまゝ、死んでも動かぬ氣色を見せた。さうは陰謀露顯に及んだかと、公卿達も闇討を見合はせることゝなつた。

その晩忠盛は、上皇の仰せに依り、舞を御覽に入れた。すると陪觀の人達が口

を描へて、

「伊勢瓶子は酢甕。」

と囃し立てた。忠盛は目が眇であつた上幾代か伊勢國に住んで伊勢平氏と
呼ばれてゐた。瓶子といふのは酒や酢などを入れる陶器で、其頃伊勢から産し
たものだから、其れをもちり合せて忠盛を侮辱したのであつた。

忠盛は、御遊半ばに、刀を主殿司に預けて置いて御殿を退つて了つた。お庭に
待受けてゐた家貞は、

「如何な御首尾で御座りましたか。」

と問ひかけた。忠盛は、明らかに侮辱の次第を云ひ聞かせては、殿中に斬り
も入り兼ねないと見たので、「いや、格別の事もなかつた」と軽く答へるのであ
つた。

節會が済むと公卿一同は、斯う云つて訴へ出た。

「忠盛は武装の護衛を御殿のお庭へ召連れ且つ自らは刀を帯して節會の座に
列したるは、孰も格式を蔑にしたる重々不法の振舞で御座ります。速かに

嚴重の御處分あらせらるべきものと存じます。」

上皇は大に驚かせられて忠盛を召して此の趣をお訊しになると忠盛は恐ま
つて、

「家來のことは私の一向に存せぬこと、多分私の身上に關し氣遣はしい事を漏
れ聞いて勝手に參つたものと思はれます。其段不都合とあれば彼の者差
し出させませう。然るべく御處分を仰ぎます。次に刀の儀は主殿司に預け
て置きましたによつて、御實見の上、是亦相當の御處分を願ひ奉ります。」

直ちに主殿司が呼出されて、忠盛の刀は上皇の御覽に供せられた。

嚴めしい黒塗の刀の中身は、銀箔を押した木刀をいれたのであつた。
當座の恥辱を脱れんがため、しかも後日の問題を慮つた忠盛の所爲は、武將た
るものゝ神妙な心掛である。又家貞が御殿のお庭に侵入したのは、主を思ふ家
來の情として恕すべき點がある。何のお尤めもないのみか却つてお褒めに預
つて忠盛は少なからず面目を施した。

ある時忠盛が任地の備前國から都へ上つて参つたとき、明石の浦は如何であつたかと、鳥羽院の仰せに忠盛は早速

「有明の月もあかしの浦風に波ばかりこそよると見えしか。」

といふ歌を奉つた。武勇の外に風流の才まで兼ねて居たことを院は深く御感賞あらせて、後日この歌は勅選の金葉集に入れさせられた。

仁平三年正月十五日、忠盛は五十八歳で歿した。その時忠盛は刑部卿に進んでゐた。

嫡男清盛が家を継いだ。

保元元年七月、左大臣藤原頼長が謀叛を起したとき、官軍に屬して功があつたので、其の賞として清盛は安藝守から播磨守に遷された。同三年進んで大宰大貳となつた。

平治元年十二月、藤原信頼源義朝が謀叛の時、清盛は官軍として戦ひ、速かに

賊徒を討平げて殊勳を立て、重大の恩賞を蒙ることとなり、翌年正三位に叙せられ、續いて宰相衛府督檢非違使、別當中納言、大納言と經上つてやがて内大臣となり、遂に太政大臣従一位に昇つて、兵仗を賜り、牛車輦車に乗りながら宮中の出入を許されるなど、破格の優遇を受けることゝなつた。

かやうに、例なき平家の繁昌を極むるに至つたのは、偏に熊野權現の御利生だと世上には噂された。といふのは、清盛が安藝守時代に、伊勢國阿濃津から舟で熊野へ参詣したことがある。其時一尾の鱧が清盛の舟に跳り入つた。或る物識が居て申すには、

「昔し周の武王の船に白魚が躍り入つたことがある。其の後武王は天下を掌握する様になつた。此度もめでたい瑞相だ。權現様の御利生に違ひない。」

と云つたので、其の鱧を料理させ、清盛親らも食へば、供の者にも食はせた。それから吉事ばかりが打ちついで、どん／＼拍子に従一位、太政大臣に進み、一家一門擧つて繁榮したのであつた。それで斯ういふ噂も起つたのであらう。

禿童

仁安三年十一月、清盛五十一歳の時、大病に罹つたので、髪を剃つて佛門に入り、法名を淨海と命じ、世間からは、其の居所に因んで六波羅の入道殿と呼ばれた。その爲めか病氣は直に全快した。

出家の後、清盛の幸運はまだ盡きなかつた。平家の勢ひは吹く風の草木を靡かすが如く、六波羅殿の御一家の人達と言へば、恐れ憚らぬものは一人もない。如何なる名士、門閥の人も對等に肩を雙べることはさておき、正面に顔を合せることすら能きないほどであつた。

清盛の小舅大納言平時忠卿は、

「吾々平家の一門にあらざる者は人にして、人でない。」

とまで云つたことがある。烏帽子の折工合から着物の着様まで六波羅風とさへ云へば、天下の人々が皆争うて真似る。如何なる人も何と加して此一門に縁故を結ばうと努めたものである。

如何なる賢主聖王の政治にも、世には失意の人が居て、鬼や角誹謗をするものである。然るに平家の我がまゝに對しては不思議に非難を口にするものなかつた。其には理由があつた。清盛は十四五歳の童を三百人選んで、髪は禿に切り、赤い直垂を着せて召仕つた。禿共は毎日洛中を歩き廻つて街衢に充ち満ちてゐる。苟にも平家の悪口を云つてる者があれば、縛上げて六波羅へ引立てる。財産は根こそぎ取上げるのであつた。それだから心に思ふ事があつても口に出して不平を言ふ者はなかつた。禿共は好い氣になつて蹴辱した。馬も車も禿共には避けて通した。彼等は御所の御門すら、姓名も問はれず自由に入した。

一門の榮華

清盛が榮華を極めたのみならず、平家の一統みな繁昌した。嫡子重盛は内大臣、左大將、次男宗盛は中納言、右大將、三男知盛は三位中將、嫡孫維盛は四位少將、一門の公卿(參議、大中納言)すべて十六人、殿上人(五位以上の公家)三十何人。其外六十

禿童 一門の榮華

餘人は各地方官中央の諸官として重要な地位を占め平家の外に天下に人は居無いかと見えた。殿上の交際すら嫌はれた忠盛の子孫であつて打揃つて斯うまで繁昌したのは時節がかはつたとは言ひながら不思議なことであつた。

清盛には娘が八人あつた。一人は花山院左大臣の奥方となられた。一人は(高倉)皇后に立たせられた。二十二歳でお産み申した皇子(安徳)が後に天位に即させられたので母后に院號が下つて建禮門院と申された。一人は六條の攝政殿(藤原)の奥方となられた。後に准三后の宣旨を受け白河殿とて尊敬せられた方である。一人は普賢寺殿の奥方一人は冷泉大納言一人は七條修理大夫に嫁がれた。安藝國嚴島の内侍が腹に出来た娘は白河法皇に仕へて女御となり、九條院の侍女常盤の腹に出来た娘は花山院の上臈となつて臈の御方と呼ばれた。

其頃平家支配の國は三十餘箇國日本の半分を越えてゐた。その外庄園田島數ふるに暇あらず家の中は花の如く門の前は市の如く揚州の金荊州の珠吳郡の綾蜀江の錦七珍萬寶一つとして闕けたものなく帝王の宮殿も神仙の棲居も之には優るまいとおもはれた。

妓王

已に全く天下を掌の中に握つた清盛入道はもう世間の誹りも嘲りをも顧みない萬事氣隨氣儘に振舞つた。例へば斯ういふ事もあつた。

其頃都に妓王妓女といふ名高い上手な姉妹の白拍子があつた。母も刀自と呼ばれた白拍子であつた。姉の妓王は入道の寵愛を受けてゐたので妹の妓女も一般に持囃された。

入道は妓王の母にも立派な家を作つてやり毎月米百石錢百貫の手厚い仕送りをするので一家安樂に暮してゐた。

白拍子といふのは鳥羽天皇の時に始つたもので始は女が男の装をして水干を着て立烏帽子を冠り白鞘卷の刀を佩して舞つたもので男舞と言つたのが後には烏帽子刀を除き水干ばかりを着ることになつて白拍子と呼ばれることになつた歌つたり舞つたりして客の心を取る一種の遊女であつた。

さて都中の白拍子は、妓王の仕合せな身の上を羨んだり猜んだり、いろ／＼噂をしてゐた。羨む者は、せめて其の名の文字にあやかりたいと、或は妓一、妓二、妓福、妓徳など、名を改めるものもあつた。猜む者は、何んの名前に關係があらう、幸も不幸も、持つて生れた銘々の運命だと、妓の字を命けぬ者も多かつた。

三年経つた。すると加賀國から、又一人上手な白拍子が現はれて來た。名を佛といつて、年は十六といふ。都の人達は、其の妙技を見て、「昔から澤山白拍子もあつたが、こんな名人は、未だ曾て無かつた」と、非常に歓迎した。

併し佛御前は

「自分の名も天下に高くはなつたけれども、まだ一度も平家、太政入道殿のお召しに預らないのは、残念なことだ。どうせ藝人だもの、管ふまい、押掛けて謁つてみよう。」

と言つて、或時西八條の御殿に推參した。清盛の家來が

「あの評判の佛御前が參上致しました。」と取次ぎをすると、入道は大立腹。

「怪しからぬ。藝人といふものは、招かれてこそ參るべきもの、自から推參することがあるものか。佛にしる、神にしる、妓王が居るのに、他の白拍子の目通りは相ならぬ。速かに引取れと申せ。」

此のすげない言葉を聞いて、佛御前は、すご／＼歸りかけてゐると、妓王は氣の毒に思つて、

「可愛相に遊女がお伺ひ致しますのは、有り勝の事、それに齡も幼い者が、折角押して參つたものを、不憫な管なう追返されては、何の様に恥かしう思ひませう。藝は御覽なさらずとも、せめてお目通りだけでも、お許しなされたらば、深いお情に爲りませう。」と執成した。入道はうなづいて

「うむ、さうまで汝が申すなら、よし逢うてつかはす。」

佛は既に車に乗つて出ようとする所を呼戻されて、入道の前に出た。

「やア、佛逢ふではなかつたが、何と思つてか、餘り妓王が執成すので逢つて遣はす。逢ふからには、一つ聞かう。まづ今様を歌へ。」

「畏まりました。」

と佛御前は、ありがたく御受をして、聲朗らかに、

「君を始めて見る時は、千代も経ぬべし姫小松。」

御前の池なる龜岡に、鶴こそむれるて遊ぶめれ」

繰返し、三度歌ふ、其の妙音に座にある人々皆うつとりと聞き惚れる。入道も感に入つて、

「さて、汝は上手なものぢや。これなら定めし舞も見事であらう。一差見ようぞ、それ鼓打を召べ。」

早速鼓打が現はれた打たせて一番佛御前が舞ひすました。もとより、髮姿目容世に勝れて聲も好く節も巧な佛御前が、且つ舞ひ、且つ歌ふ艶かさに早くも入道の心が移つた。側近く引寄せてもう放しともない様子。佛御前は、

「これはしたり、何となされまする。推してあがつた私妓王御前のお執成により、お目通りの叶つた上は、はやお暇を。」と立ち上れば、

欠

欠

「参るならば参ると申すばかりなれど、参らぬものに何と返事の爲やうがありませう。致し様があると仰せられるは、いづれ田舎へ追ひやられるか命を取られるか、二つに一つ、どちらでももう私は管ひませぬ。捨てられた身がどうして再び顔が向けられませう。」

と妓王は、やはり返事をしなかつた。

「今の世の中に、入道殿の仰せに背いてなるものか。汝は其れでも管ふまいが、年寄りの身の都を追はれて知らぬ他國に彷徨ふ悲しさも思ひやつて呉れ。」

と母親は涙ながら掻き口説いた。妓王は二度と再び入道の前には出まいと、決心をしてゐたけれど、老母の行末が氣の毒さに、我意も張りきれず、さりとて一人で行くのも辛し、妹の妓女と外に白拍子を二人連れて、あはれやしほくと西八條の邸へ出向いた。

妓王が席は以前と違つて遙か末座に構らへてあつた。何の過ちも無くて出された上に、席まで下げられるとは餘り淺間しいと、妓王は胸がいつぱいになつて涙がはふり落ちる。それを見た佛御前は氣毒さに堪へず、席を上げる様に入道

に勧めた末

「妓王ごのお傍近くお召し遊ばされませぬれば、どうぞ私にお暇を下されませ。」

とまで云つたが、聴かれなかつたので、どうと佛御前は其の場を外してしまつた。

入道は妓王に對つて、

「其後は如何致して居つた？佛御前が徒然かつて居る程に、汝慰めて遣はせ、今様を歌へ、舞もまへ。」

と云付けた。妓王は無念ながら、參つた以上は入道に抗ふまいと觀念して、

「佛も昔は凡夫なり 我等も終には佛なり

何れも佛性具せる身を 隔つるのみこそ悲しけれ。」

と泣くく二遍繰返して歌つた憐れさに、居並ぶ平家一門の公卿殿上人、諸太夫侍に至るまで頭を垂れて涙ぐんだ。

さすがに入道も心を動かして、

「いかにも有理ぢや。舞も見たいが、俄かに用も出来たれば、もはや引取つて宜しい。此後は勝手に參つて歌ひもし、舞ひもして佛を慰め遣はせ。」

妓王は何の返事も申さず涙を忍へて退つた。

家に歸りついて、さめくくと泣きつゝ口説くには、

「あゝ口惜しい。母の身上を思ふばかりに辛さを忍んで參つたに、辱の上塗りさせられた。生きてゐたら、此上憂目を見よう、いつそ身を投げて死んだがまし。」

妹の妓女は「私も死ぬる」と共に泣く。之を聞く母親は尙悲しく、

「其の様の事があらうとも知らず、勧めて西八條へ遣つたのが今となつては、怨めしい。姉妹が身を投げて死なう、といふに、老い先短い此の母が、生きながらへて何とせう。母も死なうよ。」

親娘三人諸共に泣いてゐたが、やがて妓王は涙ながら、

「いや、母上を非業に死なせては濟みませぬ。口惜しの餘りに身を投げうとも申しましたが、もう思ひ止まりました。このまゝ居ては又どんな憂目を見よ

うも知れず、兎も角都の外に出でませう。」

と、二十一の花の盛りを、黒髪切り棄て、尼となり、嵯峨野の奥の山里に引込んでしまつた。妹の妓女も十九歳で尼となり、姉の後を追うて同じ柴の庵に籠り、姉妹は念佛に日を昏した。

二人の娘が尼になつたのに、年老いた母が白髪を立て、居て何にならうぞと、四十五歳の母親も頭を剃つて、一つ庵に親子三人共々後生を願ふ。

かうして、静かな山里に春を送り、夏も過ごした。秋の或る夕の事であつた。

三人の尼達は、山の端に隠るゝ日かげを眺めながら、「あの日の入り給ふ所が西方浄土であらう、いつか吾々三人も彼土に生れて物思ひの無い安らかな日を過ごさうよな」と語り合つて居るうち、段々聞くなつて來たので、竹の編戸を閉ぢ塞いで、燈火幽かにかきたて、諸共に念佛を唱へてゐた。

思ひがけなく、ほど／＼編戸を叩く音がする。

晝も訪ぬるものゝ無いところへ、此の夜深けに戸を叩くとは、もしや魔か人かと、女ばかりの三人は、恐るゝ顔を見合せた併し、閉めておいたとて押破るにわけ

のない竹の編戸、何にもあれ出て見ようと、三人は互ひを力に手を取り合せておぼづと戸口を開けた。思ひがけない。魔ではなくて佛御前が外に立つて居たのである。

「お、佛御前、夢ではないか。」

と驚く妓王の前に、佛は涙顔、

「なつかしい妓王御前。今更斯様のこと申さずとも、事なれど申さねば又餘り心なき様にもあれば申します。西八條の御殿には、私より推しかけて参つたもの、それに意ひがけなく入道殿があなたを出され、をめ／＼其跡に押し止められて居ましたは、心ならずとは言へお恥かしい事と存じて居りました。貴方が御殿をお立退きなされるのに、何の嬉しいどころか、私はこんな悲しい日がいつか、やはりわが身の上にもと思ひ、あの障子にお書き残しの「いづれか秋にあはで果つべき」ほんにその通りと胸にしみて居りました。其後お在所が知れず、ごうなされたやらと案じ昏してゐる中、ふと此頃お三人が姿をかへて此の里においでなされると聞き及び、もうお羨ましさかたへられず、度々お

暇を願うても、更に入道願の御取りあげがありませぬ。熱々想ひまするに、娑婆の榮花は夢の夢、樂み榮えたどて何になりませう。折角人に生れながら佛法にもあはず、後生をも願はず。此のまゝ地獄に墮ちては、浮ぶ瀬は又無いとやら、老少不定。若いとて頼みにはならぬ人の命あすとも言はず。今直にと今朝ほど密かに邸を脱け出で、斯様になつて参りました。」

と言ひつゝ、被衣をおし脱ける。いたましや佛御前も髮剃りこぼつて尼となつてゐたのである。

「かうして参つた上は、どうぞ是迄の科お許されて下さりませ。許すと仰せ下されたら、これから共々に念佛申して、未來は一つ蓮の上の身となりませう。もしお許しがなくば、何處へなりと彷徨ひあるき、苔の席松の根にも仆れ臥して、生涯を念佛に暮しまする。」

と泣きくごいた。妓王も共に泣いて、

「それ程のお心とは、夢にも知らずともすれば、怨み心が起るのは、後生の障にならうぞと、吾ながら淺ましがつて居りましたに、其のお姿でお出なされた上は、

日頃の怨露程も残りませぬ。後生の爲めにも何より嬉しう思ひます。今年やうやう十七のお若さで、淨土を願はうとのお志は、誠の大道心、嬉しう善智識さま、さあ御一緒に後生を願ひませう。」

之より一つ庵に籠つて、四人は、朝夕佛前に香華を供へ、一心に念佛を勤めて、遅速はあつたが、皆美しい往生を遂げたといふ。後白河法皇の長講堂の過去帳にも、妓王、妓女、佛刀、自が尊靈と、四人一緒に書付けられてある。

二代の後

保元の亂に爲義が殺され、平治の亂に義朝が誅せられてから、源氏の一類は斬られたり、流されたりして、平家の一門だけが繁昌した。

鳥羽法皇がお崩れになつた後、保元平治と兵亂が打ちつゝいて、死罪流刑などに處せらるゝものが絶えずあつて、世の中は兎角騒しかつた。

主上(二條)と上皇(後白河)との御間に御隔が出来て、思ひの外、出来事もあつた。その中で、天下の耳目を驚かしたことがある。

故近衛院の后太皇太后宮と申し奉るは、大炊御門右大臣藤原公能公の姫君で、先帝お崩れの後は、近衛川原の御所に寂しい日を送つてお在になつた。御年二十二三、御盛りは少し過ぎさせられたけれど、天下第一の美人の聞えが高かつた。主上は此の太后宮を后に立てようとの思召で、近衛川原の御所へお艶書使が立つた。もとより太后宮に於て御聴き入れはなかつたのである。主上は頻りに思ひ焦がれさせられて、直接に其の御實家たる右大臣家へ太后宮を御入内させ申す様仰せ下された。

餘りといへば奇怪な事なので、公卿達は會議を開いて「支那には唐の則天武后が太宗高宗父子の二代の寵を蒙つた例もあるけれど、我が國に於ては神武天皇以來七十何代の間二代の后に立たせられたといふは、曾て例の無い事此の儀はお沙汰止めに遊ばすやうに。」と上奏した。上皇も其の宜しくないといふ事を仰せられたのであつた。併し陛下は御聞き入れあらせられず、「天子に父母なし、吾れ萬乗の尊位に在りて、是程の事意に任せぬことあらうや」とやがて御入内の日取までも仰出された。

太后宮はこれ聞かせられ、先帝御崩れの時同じ野原の露と消ゆるか、又は出家遁世もしてゐたらば、斯様の事もあるまいにと、大層お歎きになつた。父の右大臣は、

「世に従はざるを狂人と申す、既に勅命が下つた以上是非がない。御入内の上、皇子御誕生にも相成り、君は國母、愚老は外祖と仰がれる瑞相かも知れず、速に御入内あらせられよ。」

なご、申したけれども、太后宮は何とお答へもなされなかつた。其のころ、太后宮がお手習の序に、

「うき節に 沈みもやらで 河竹の

世にためしなき 名をや流さん」

とお詠みになつた歌を、どうしてか漏れ承つた人々は、婦人の御身として如何にも切ない其のお心に同情し奉つた。

御入内の日が来た。太后宮はお氣が進ませられぬのを、父の公能がいろく、に言ひこしらへてやつと夜半頃になつて、無理にお車に召して御入内になつた。

御入内の後は麗景殿にお住ひになつた。

「思ひきや

憂身ながらに

廻り来て

同じ雲井の

月を見んとは」

といふお歌は前にかはらぬ宮中の有様を御覧になつて先帝の昔を戀しう思召しての御述懐である。まことに哀れな御事であつた。

額打論

永萬元年の春主上(天皇)御不例の御事が聞え渡つたが夏の初めにはもう御重態と申すのであつた。

六月二十五日大藏大輔伊岐兼盛が娘が腹にお生れになつた第一皇子、御年二歳にならせられるのに、親王宣下があつて直にその晩御位をお譲りになつた。

清和天皇は御年九歳、鳥羽天皇は御年五歳、近衛天皇は御年三歳で、踐祚遊ばされたが御年二歳で御即位の先例は無いのである。

二條上皇は御讓位の後間もなく閏七月二十八日に御年二十二でお崩れにな

欠

欠

ある。

同年五月二十日新帝(高倉)は大極殿で御即位あらせられた。國母建春門院は清盛入道の奥方二位殿の御妹君に當り、大納言平の時忠は、この女院の御兄君である。其頃の叙位任官は、皆外戚たる時忠卿の心の儘に行はれ、太政入道(仁安二年清盛大)も天下の大小事一々諮問をして決するので、世間では大納言の時忠をば平關白と謂つてゐた。

殿下の乗合

嘉應元年七月十六日後白河院は御出家を遊ばしたが、尙ほ依然として天下の政を知召された。院中に仕へる公卿殿上人北面の侍に至るまで官位俸祿皆身に餘りありながら、人情の常で、なほ飽きたらず誰が死んだらどの國が空くだの、彼がしくじつたら、其の官にならうなど、親密な間がらには話し合つてゐた。

後白河院は内々、清盛が振舞は餘りに我儘が過ぎる。昔から朝敵を平らげた功臣も多かつた

が、かほどの寵遇を蒙つた例は無い。貞盛秀卿頼義義家の如きにすら行賞は僅かに地方の長官たるに過ぎなかつたものを。」

なご、云つておいではなつたが機会も無いので何といふ御處置もなく平家の方でも別にお恨み申すこともなかつたが不圖した事が世の亂れる初めとなつた。

嘉應二年十月十六日此の日少し雪が降つた。枯野の景色が面白いと、重盛の次男で其頃越前守といつた十三歳になる新三位中将資盛若侍三十餘騎を従へ蓮臺野や紫野右近の馬場のあたりに鷹狩を催し、一日狩りくらしして薄暗くなつたころ六波羅へ歸りかける途中攝政藤原基房卿が参内の行列とばつたり行合つた。基房卿の供は、

「殿下の御出ぢや、下馬よく、何者ぢや。狼藉者奴。」

と叱り付けたが、世間を我ものと心得てゐる平家の者共殊に資盛が家來は執れも廿歳以下禮義も作法も辨へない若侍ばかりで攝政も殿下も眼中にない、無茶苦茶に駈破つて押通らうとする。暗さは暗し大政入道清盛の孫とも知らず、

又幾分か知つても知らぬ振り、資盛を初め侍共残らず馬から引摺りおとし思ふ存分辱をかゝせたのである。

資盛は這々の體で六波羅へ逃げ込んで斯くくと祖父の入道に訴へた。入道は額に青筋立て、

「縦ひ殿下にしるこの淨海に多少の遠慮は爲られる筈ぢやに、あの幼い者に恥辱を與へるとは怪しからぬ。打棄て置いては平家の威嚴に關はる。此の怨み思ひ知らして遣らいでは。」

と火のやうに憤つた。重盛は押し止め、

「さほど御立腹にも及びますまい。これが頼政光基など源氏の輩に恥辱を受けたとあれば、まことに平家一門の恥とも申すべきなれども、對手は武門の人にあらず、重盛の子ともあらうものが、殿下の行列に逢ひながら下馬をせぬと申すことは許しがたい不心得彼方を怨み申すことは御座りませぬ。」

「以後は急度慎め。御出ども心得ず無禮を仕つたと殿下にはお詫びを致さぬ

ば相成らぬ。」

と云つて厳しく誡めた。

其後清盛入道は重盛には内々で粗剛な田舎侍十餘人清盛の命より外世の中に恐ろしい事は無いやうに心得てゐる者共を集めて、

「この二十一日に基房が参内する筈ぢや何處でか待伏せて、供の物の髻ぶら切つて資盛が恥辱を雪げ。」

と云付けた。

攝政基房卿はそれとも知らず明年主上御元服の御定の日で大切な儀式の日だから平常よりは儀式立つた行列を整のへて徐々と通り掛るを途中に待受けてゐた六波羅勢、残らず武装した三百餘騎が前後からおつ取り圍んでごつと関を作つた。今日を晴れと装束した基房卿の供の者どもを彼處に追懸け此處に追詰め取つて押へて一人も残さずぶつくと髻を切りはなつた。其の中藏人大夫隆教の髻を切る時には、

「この髻は汝のではない。基房の髻として切るのぢやぞ！」

と故に斷つて切つたのである。そして基房卿の乗つた車の中へ弓の弦を突入れたり車の簾を引ちぎつたり牛の胸當鞆を切放したり亂暴の限を盡して凱歌をあげて六波羅へ引上げた。

清盛入道は大きに喜んで侍ごもの手柄を賞めた。

基房卿は鳥羽國久丸と云ふ下臈が破れ車の繕ひ合はせてくれたのに乗つて、東帯の袖で涙を押へながらやつこのことで邸へ引き還へされた。

大織冠鎌足公以來藤原家の威勢は天下に鳴響いてゐた。殊に一門の長者たる攝政關白ともあらうものがこんな侮辱を受けたのは曾て例の無い事であつた。

重盛はこれ聞いて打驚き其時關係した侍共を悉く放逐した上、

「悪いのは資盛ぢや。梅檀は二葉より香しいといふに、十三にもなる者が禮義を辨へず斯様な都合な事を仕出來し入道の悪名を立てられるに至つたのは皆汝一人に起つたこと不孝千萬ぢや。」

と資盛を伊勢國へ追ひやつた。これを聞いては平家を憎む人々も重盛に敬

服せぬものは無かつた。

鹿の谷

右の椿事の爲め、主上御元服の御定めは延期となり、二十五日に取行はれた。基房卿は十一月十四日太政大臣に昇任の御汰沙があつた。明けて嘉應三年正月五日主上一(御十)御元服の御儀式が済んで清盛入道の姫君徳子(通禮)御年十五になられるのが、法皇の御養女として女御にあがられた。其頃内大臣左大将であつた藤原師長卿が大將辭任を申出た。徳大寺大納言實定卿花山院中納言兼雅卿、故中御門藤中納言家成卿の三男新大納言成親卿などが、左大将の補缺を望んだ。中にも、後白河院の御覺え目出度き新大納言は様様の祈禱を始めた。先づ八幡に百人の僧を集めて、七日間大般若經を讀ませてゐると、甲良大明神前の橘の木に男山八幡の方から山鳩が三羽飛んで来て、咬み合つて死んだ鳩は八幡大菩薩の第一の使者である。宮寺に於て斯様の不思議な例しは無いと、時の檢校匡濟法師は、此趣を宮中へ奏上した。宮中では神祇官

に占を仰付けられた。祇官は、

「是は重大な災難の前兆である。併し君主に關した事ではなく、臣下の身の上の事である。」

と占つた。然るに新大納言は之に恐れ慚むことなく、中御門鳥丸から賀茂の上の社へ七夜續けて徒歩で參詣をした。満願の夜宿所へ歸つて寝てゐると、夢に賀茂の上社の御寶殿の戸が開いて、

「櫻花 賀茂の川風 うらむなよ
散るをば えこそ留めざりけれ」

と、氣高い爽かな御聲が聞えた。

新大納言は仍これにも恐れず、御寶殿の後の大杉の洞に壇を立て、或る僧を籠らせて百日間秘密の祈りを行はせた。

ある日、一天俄かに搖曇つて、猛烈に鳴出した雷が、其の大杉に落ちかゝり、燃上つた雷火のため、既に社殿も危くなつたのを、神官達が駈集つて、やつと消し止めた。

彼の祈禱を行つて居た僧を追出しにかゝると、百日の願が今七十五日になる、満願の日までは決して動かぬと強情を張つたけれども、神官共は杖で打ち叩いて遂に追拂つて了つた。

神は非禮を受け給はぬに、成親が吾身不相應な事を強ひて祈つたため、かうした珍事も起つたのであらう。

ところが、其頃の叙位任官は、後白河院のお計ひでもなく、主上は御幼少であり、攝政關白の力も及ばず、全く平家一門の勝手氣儘であつたので、左大將には大納言右大將たる重盛が爲り、中納言宗盛が一躍して右大將に任せられた。

左大將を望んで得なかつた徳大寺大納言は、上席でもあり、家柄も宜しく才學も人に優れた人であるのに、平家の次男宗盛の風下に立たねばならなくなつたので、大方出家でもされるであらうと噂されてゐたが、暫く世の成行を見ようと言つて、大納言を辭して出家のことはなく、唯だ引籠つてしまはれた。

新大納言成親卿は、

一徳大寺花山院の下に、つのは是非もないが、宗盛なんごの下に立つのは遺憾

欠

欠

に流刑と定まつてしまつた。

清盛入道も僧徒からの投書を受けて、先座主(明)の處刑に就て、寛大の御處置を仰がうと思つて參内したが、法皇は御風氣といふので、謁見も許されず、空しく引退つた。

僧徒が處罰を受けるときは、還俗させられて俗人の扱ひを受ける例で、明雲大僧正は大納言大夫藤井松枝と俗名を命けられた。

先座主は村上天皇第七の皇子、具平親王六代の御末たる久我大納言顯通卿の子で、座主となつたのは仁安元年二月廿日であつた。當時天下第一の高僧として、君臣上下に尊ばれてゐたのであつたが、曾て、陰陽頭安倍泰親は、

「かういふお方が明雲と名乗られるのは宜しくない。上には日月を並べ下には雲がある。」

と非難したといふことである。

二十一日、いよいよ先座主の配所は伊豆國と定まつた。西光法師父子の讒奏があるので、外の者が如何ほどお宥しを願つても、法皇の御心を和げることには出

來なかつたのである。やがて京都放逐の日が來た。官人共が白河の住所に行つて追立てることゝなつた。

比叡山では我々の狙ふ敵は西光法師父子の者だといつて、父子の名を認め根本中堂に祭つてある十二神將の一なる、金毘羅大將の左の足の下に敷き、

「十二神將、七千夜叉時を移さず速に西光法師父子の命を奪ひ給へ。」

と喚き叫んで呪咀したのは、怖ろしいことであつた。

先座主は二十三日に、いよ／＼伊豆國の配所へ向つて出發することゝなつた。今日を限りに都を出て、遠い東の邊地へ流される大僧正の心の中、推しはかられて哀れであつた。

夜明頃、大津の打出の濱へ着いた。比叡の方をながむれば、青葉の中に文珠樓の軒端が白々と見える。先座主は二目とも見得ないで、顔を袖に押當て、涙に咽ばれた。

澄憲法印は餘り名殘惜しさに粟津まで見送つて來た。先座主は法印の切なる心に感じて、年來心に秘めてゐた釋尊傳來の一心三觀の血脈相承といふのを

授けた。

比叡山では此日大會議が開かれた。

「義真和尚から、此方天台座主五十五代に至るまで、いまだ流罪に處せられた例はない。如何に末代とはいへ、むざ／＼王城鎮護の靈地たる當山に瑕が附けられようか、是非とも座主を奪り返せ。」

と三千の山徒ごや／＼と皆東坂本へ驅下り、十禪師權現前に集つたが、

「粟津へ行つて座主をお助け申さう。併し追立の役人ごもが附いてゐる。容易にはお助け申されまい。此上は山王大師のお力に絶る外は無。」

と老僧ごもは合掌して、

「座主をお助け申すことが出來るものならば、目のあたり一つの瑞相を見せ給へ。」

と肝膽を砕いて祈禱した。

すると、無動寺法師乘圓律師の召使で、十八歳の鶴丸といふ者が、俄かに身を藻掻き始め、五體に汗を流して狂ひ出した。十禪師權現がお憑り移りになつたの

座主流し

である。

「末代とはいへいかでか我山の座主を他國へ流させう。座主を他國へ流させておめく此山の麓に居られうか。」

鶴丸は左右の袖を顔に當て、さめく泣いた。

「まこと十禪師權現の御託宜ならばこれを一々元の持主に返し給へ。」

と老僧も四五百人手々に持つてゐた珠數を十禪寺權現御堂の縁の上へ投げ上げた。

鶴丸は駆け廻つて拾ひ集め、其珠數を一々元の持主へ間違ひなく手渡した。

いかにも神明の靈驗の不思議さに、皆々感涙を流し、

「では急いで行つて奪り返せ、座主をお助け申せ。」

志賀唐崎の濱路傳ひに驅出す者もあれば山田矢走の湖上に舟を押出す者もあつた。雲霞の如く寄せて來る大衆を見て、追立の役人どもは膽を潰して逃げ出してしまつた。

先座主は其時國分寺に著いてゐたが、此の騒ぎとなつたので大に驚いて申る

るゝには、

「勅期の者は日月の光にだに當らずといふことがある。殊に我身は時も移さず追下せと特に殿しいお咎めを蒙つて居る身ぢや、少しの猶豫も致しては居られぬ、妨げせずの方々は、お山へ早く歸り上られい。」

とは云つたものゝ、更に端近く立ち出で、

「出家して此方、我は叡山の興隆を忘れたことはない。又國家の平安を祈ることも疎かにはしなかつた。方々を教へる志も深かつた。これは定めて神佛も御照覽のことゝ存する。身に過ちなしと思へば、今無實の罪に寄つて流罪に處せられるとも、少しも恨みとは思はぬ。遙々此處まで訪ねて呉れた方々の芳志、誠に辱けない、生々世々に報じ盡せる事でない。」

と云ひながら衣の袖に涙をおさへた。僧徒も共に皆鎧の袖を眼にあてた。

やがて先座主の前に輿を昇ぎ出して僧徒等は、

「早くお召しなされませ。」

と追き立てるけれ共、先座主は首を振り、

「元は三千の衆徒の座主であつたが、今は卑しい罪人ぢや。どうして尊い修學者智慧深き大衆達に輿を昇がせられようぞ。縦歸山するにも鞋でも穿いて歩くのが當然ぢや。」

と云つて埒があかぬ。すると黒草威の大鎧を着て、白柄の長刀を杖についた身の長七尺ばかりの荒法師、戒淨坊阿闍梨祐慶といふのが多勢の中を押分けて先座主の前にゆるぎ出で、大目玉を光らせて、

「左様な素直なお心掛けなればこそ、斯様な憂目も御覽になる。とつと、お乗りなされ。」

と呶鳴つたので、その權幕に恐れ急いで輿に乗られたのを立派な地位の僧達に寄つてたかつて昇上げて、険しい山坂も平地を飛ぶやうに比叡山へと駆け登つた。

大講堂の前に著いた。また其處で會議が開かれる。

「さて座主はかうしてお連れ申したが、一旦お答めを蒙つた方を再び座主に仰ぐといふことは如何なものであらう。」

すると、前の戒淨坊阿闍梨祐慶が進み出て、

「それ比叡山は日本無雙の靈地、國家鎮護の大道場である。國法と並んで佛法は尊嚴である、さればこそ下々の法師共に至るまで世間に重んぜられてあるのぢや。特に學問秀で德行高き一山の和尚たるもの罪なくして罰を蒙り給ふこと三千の衆徒は勿論世間に於ても亦遺憾千萬とすると、再び座主に仰ぐ共何の憚ることあらうや。粟津から奪ひ返へし奉つた違勅の罪は、この祐慶が張本人となつて、禁獄流罪は何のそのよしんば首を刎ねられるとも却つて名譽と致す所である。」

と雙眼よりはらりと涙を流しながら云つたので、それを聞いた一同は皆最も同意した。

祐慶は此時から「怒房」と云はれ、弟子の慧慶律師は「子怒房」と諱名を附けられた。

一行阿闍梨

叡山の大衆は奪ひ返した明雲先座主を東塔の南谷妙光坊に置いた。災難といふものは如何な名僧も免れることの出来ないものと見える。昔し唐の一行阿闍梨は玄宗皇帝の御持僧であつたが玄宗の後揚貴妃に關する浮名が立つた。根も葉もないのであつたが何處の國も何時の世も人の口はうるさいもので、之が爲め阿闍梨は火羅國へ流されることゝなつた。火羅國へは三筋の道があつた。一筋は輪地道といつて御幸の達、一筋は幽地道といつて人民の道、一筋は暗穴道といつて重罪の者の通る道である。

一行阿闍梨は大罪人として、暗穴道へ遣られた、その道は七日七夜の間に月の光も照さぬ眞闇な路を行くのである。けれども天は無實の罪に依つて流される一行阿闍梨を憐んで九曜の星の象を現はして行手を示しつゝお守りになつた。其の時一行阿闍梨は右の指を食ひ切つて左の袂に九曜の形を寫しておいた。これが和漢共に眞言の本尊とする九曜の曼陀羅の起源である。

西光新らる

比叡山の先座主明雲を流罪の途中僧徒等が奪ひ取つたといふことを聞召めし、後白河法皇は甚だ御立腹になつてゐる處に西光法師は、

「山門の大衆が我儘な振舞は、今に始まらぬことゝは申せ、今度といふ今度は、以ての外の不埒で御座ります。これをも嚴重の御處分あらせられず、又もやお捨置き相成らば、天下の政道は廢り果てませう。」

と忠義顔に申上げた。

間もなく新大納言藤原成親及び近習の面々は、法皇の仰せを受け叡山征伐の準備最中だといふ風評が立つた。苟も王地に生れて、法皇の詔命に背いては勿體ないと、内々院宣に隨はうといふ僧徒もある、なごといふ噂もあつた。

妙光坊にゐた明雲は、この噂を聞いて又どういふ憂目に遭ふことかど氣が氣でなかつたが、法皇からは何の御沙汰もなかつた。

さて成親等の企てゝゐた平家追討の陰謀は、此の山門の一件のため暫く中止

となつてゐた。密議や支度なども色々あつたけれども到底成功しさうにも思はれないので、一番頼みにせられてゐた多田藏人行綱は、駄目だと見切をつけたものか、囊に弓袋の材料に貫つた布は帷や直垂家來の着衣に仕立て、使つてしまひ、知らん顔をしてゐた。其上、「どうせ平家を滅さうなご、は出來ない相談だ、他の口から露見して殺されるより、いつそ裏切りして助からう」と考へ付き、同月二十九日の夜、西八條の清盛入道邸に行つて、申上げたい事があると言つた。清盛入道は、平生來もせぬ行綱が、何の用が出來たかと、主馬判官盛國に、其の用向を聞き取らさうとしたが、直接でなくては明かされない大事だといふので、自身で行綱に對面した。

「夜も更けたに何を火急な事件ぢや。」

「近頃院中で戦争の準備をしてゐることを御存じで御座りまするか。」

行綱はかう云つた。清盛入道は事もなげに

「叡山征伐の準備と申すではないか。」

「それは表面實は平家の御一門を滅さうとの御謀で御座りまするぞ。」

さつと清盛入道の顔の色は變つた。

「何と？法皇も御承知あらせられての事か。」

「申すまでも御座りませぬ。」

と行綱は小聲になつて、康頼はかう云つた。俊寛はあゝ云つた。西光はかうしたと、尾に鯨つけて云ひ散らし、自分の事ばかり好い様に取つて、例の五十反の布の一件はおくびにも出さなかつた。やがて暇を告げると。

清盛入道は聲を厲しく侍ごもを呼んだ。

之を聞いて行綱はなまじかなことを云つて、證人にでも立てられては困ると思つて、野に火が付いた様あわて、門外へ逃げ出した。

筑前守貞能が來たのを見た清盛入道は、

「都は謀叛人で一杯ぢや。一門を招集して、早速戦の用意を致せ。」

と云ひつけた。筑後守は八方へ觸れ歩いた。右大將宗盛、三位中將知盛、頭中將重衡、左馬頭行盛を初め、平家一門の面々、甲斐々々しく身仕度して、驅付けた。其外侍ごも我後れじと集つて、其の夜の中に西八條の入道邸には六七千騎の軍

勢が充ち満つた。

「明くれば六月一日の拂曉、清盛入道は安倍資成を法皇の御所へ遣はし、大膳太夫信成に、

「新大納言成親卿以下近習の面々、我が一門を滅ぼして天下を亂さんとす。陰謀あるによつて、一々搦捕つて詮議を致す筈なるが、法皇は恐らく此事御存じあらせられまいと存するが如何。」

と云はせた。之を聞いた信成は色を失つて早速法皇へ申上げた。

「あゝもう其事が入道の耳に入つたか。これは何とした事ぞ。」

法皇は御驚きのあまり、はつきり御分別も付かせられず、清盛に對する御返答も遊ばされなかつた。

資成は飛んで歸つて、ありの儘を清盛入道に知らせた。

「さては行綱が密告の通ぢや。若し行綱が知らせなかつたら、此の淨き無事では居られなかつたわい。」

と筑後守貞能、飛驒守景家に、

「陰謀者は一人も残さず搦捕つて來い。」

と嚴命を下した。これから二百騎三百騎と平家の軍勢は幾手にも分れ、此處彼處へ押寄せて搦捕つた。さて中御門烏丸の新大納言邸には、

「至急御相談致したいことが御座る。是非御光來を願ひたい。」

と言つてやつた。

成親は我身の上とは露知らず、

「あゝ、大方法皇の叡山處罰を申宥めようといふのであらうが、非常に御憤りが強いから、其は到底叶ふまい。」

と云ひ、支度をして侍三四人を召連れ、常よりも體裁をつくつて綺麗な牛車に乗つて烏丸の邸を出た。

西八條近くなると、あたりに軍勢が群がつて、如何にも物々しい。

「これはどうぢや。一體何が起つたのか。」

胸騒ぎしながら門前で車を下り、門の内に入つて見ると、隙間もなく兵が満つてゐた。中門の入口へ進むや否待ち構へてゐた荒らくれ武者どもが飛び出し

て引捉へ、

「縛りませうか？」

と云ふと、簾の中から覗いてゐた清盛入道が、

「それには及ぶまい。」

と答へたので、侍どもは十四五人で成親を取圍み手を取つて、縁の上へ引上げ、とある一間へ押籠めてしまつた。

成親は夢心地、供の者は追ひ散らされ、牛飼は車を置き去りにして逃げ去つた。

近江中將入道、遠淨法師、勝寺執行俊寛、山城守基兼、式部大輔正綱、平判官康頼、宗判官信房、新平判官資行等も、やがて西八條へ引立てられて来た。

此を聞いた西光法師は、すは、一大事と急いで法皇の御所へ駈付け、途中で行き逢つた六波羅勢、西光法師を押取巻いて、

「西八條のお召しちや。早く參れ。」

「いや、奏上すべきことがあつて院の御所へ參るところちや。歸りに參らう、西八條へは。」

西光法師は面を赤めていふ。

「悪坊主めが何を奏上するのだ。」

と馬から引落し、縛上げて西八條へ引立てた。陰謀の發頭人なので特に嚴重に警護をして中庭へ押据ゑると、清盛入道は廣縁に立ち出て、ハツタと睨み、

「己れ當家を滅さんとした謀叛人、奴今その態はどうちや。此方へ引摺れ。」

と縁側へ引寄せさせ、履物の儘足を揚げて、西光が面をこり／＼と踏み躪り、下臈の分際で過分の官職を授かり、父子とも勝手な真似をする奴ちやと思つてゐたが、罪もない天台座主を流罪に行ひ、其上當家を亡ぼさうとの謀叛に荷擔したのぢやな。さあ有體に申立てい。」

西光も剛膽者、少しも惡びれた様子なく、

「院中に御側近く召仕はるゝ身であれば、新大納言の戦の準備に與みしないとは申されぬ、如何にも加擔致したに相違ないが、餘り片腹痛いことを仰せられるな。其許は刑部卿忠盛の作で、十四五までは何の官位も無く、ぶら／＼として朝夕高足駄穿いて往來せられ、京童から「例の高平太」がと指されて御座つ

た其内保延の頃海賊三十餘人を搦め捕つた手柄に依り俄かに四位の兵衛佐となられたのを世間では過分の出世と云つてゐたことぢや。殿上の交際さへも嫌はれてゐたものゝ子孫でありながら今太政大臣とまで經上つた其許こそ眞過分と申すものぢや。侍たる此の西光が子が國司檢非違使になつたとて先例の無いといふではなし何過分なことが有らう。」

と云ひ返した。清盛入道は餘りに腹が立つて物が云へなかつたが、「此奴が首滅多に斬るまいぞ能く〜吟味して事實を明かにした上河原へ引出して斬つてやれ。」

松浦太郎重俊が此の命を承つて手足を挟みなどして様々に殿しい拷問を加へた。西光は固り有のまゝを申立てた其白狀の趣を四五枚の紙に書取りそれから口を引裂いた後五條西の朱雀に引出して斬り殺してしまつた。

尾張の井戸田へ流されてゐた西光の嫡子師高は同國の住人小胡麻の郡司維季に命じて討たせ次男師經は獄から引き出して殺し其弟師平も家來三人と共に首を刎ねられた。

小教訓

西八條の入道邸の一間に押籠められた新大納言成親は汗みごろになつて、「これは急度日頃の計畫が漏れたのに違ひない。一體誰が漏らしたのか多分北面の侍ごもの中であらう。」

など考へてゐると後の方でづし〜と足音が聞えた。

「さあ殺しに来た。」

一縮みになる間もなく成親が坐つてゐる後の障子を、手荒くさつと引き開けて入つて来たのは清盛入道であつた。

怒りの眼に睨みつけて、

「其許は平治の亂で殺される筈であつたのを重盛が身に代へ命乞ひをしてお助け申したのぢや。その恩を忘れ何の遺恨があつて當家を亡ぼさうとなされる。恩を知ればこそ人間恩を知らぬは畜生ぢや。さあ包まず有様を白狀なされ。承はらう。」

「左様なことはありませぬ。大方誰かの讒言と思はれます。能くお取糺しを願ひたい。」

云はせも果てず、

「誰れぞ、参れッ。」

入道の呼ばはる聲に、貞能がやつて来た。

「西光奴が白狀を此處へ。」

貞能が直に持つて来た。それを取上げ、高らかに二三度讀み聞かせて、

「さても、憎い奴此の上何を云ふことがあるものか。」

其の書類を成親の顔に叩付け、びしやりと障子閉て切つて出て行つたが、まだ腹が立つて堪らなかつたものと見え、難波次郎經遠、妹尾太郎兼康を呼寄せ、

「彼奴を庭へ引摺り下せ。」

「さう致しましては、小松殿の思召し如何で御座りませう。」

「何ちや？ 汝等は重盛を重んじて、この入道を輕んずるのぢやなあ。」

かう云はれては止むを得ない。難波と妹尾は立上り、成親の手を取つて庭へ

引摺り下した。清盛入道は心地よげに、

「押し伏せて叩き付けい。」

二人の者は成親の左右の耳に口を寄せて、

「聲をお立てなされ。」

と云ひ、そつと押へ付けた。すると成親がさも痛さうに二聲三聲ヒーヒ

ーと喚き立てる。恰も餘所目には業の秤にかけ、淨玻璃の鏡に引向けて、地獄の鬼

どもが娑婆の罪人を呵責する時のやうに見えた。

成親は暑い炎天の庭先で、汗と涙とに濡れながら、丹波少將成經初め幼い子供

等までが、ごんな憂目に遭はされることかと考へた。

「併し小松殿の耳に入るなら、まさか見殺しにもなされまい。」

とも思ふけれども、さて此ことを誰に頼んで重盛の耳に入れようといふ分別

もつかなかつた。

小松内大臣重盛は、物に騒がぬ沈着な人で、大分時間が経つてから、嫡子權亮少將維盛と車に合乗りして、僅か七八人の供を連れたばかり一人の軍兵も召連れ

す、平服のまゝ悠々として参られた。

これを見た清盛入道初め一門の人達は、拍子抜けがしたやうだった。

重盛が中門の口を入らるゝとき、貞能がつつと出て、

「これほどの御大事に何故一人の軍兵もお召連に相成りませぬ。」

と云ふと、重盛は、

「大事とは天下の事を申すものぢや。かう云ふ一家の私事を大事といふことがあるものか。」

と云はれたので、仰々しい武装で控へてゐた者どもは、きまりを悪がつて脇を向いた。

「成親卿は何處へ居られる？」

と重盛は思ひながら、其處此處を探してゐる内、ある部屋障子の隙子を、嚴重に繩をかけたところがあつた。此處らしいと押開けて見ると、果して成親が泣き伏してゐたのである。

「如何成された？」

と重盛が聲をかけた。顔を上げた成親は、重盛を一目見て、地獄の罪人が地藏菩薩を見たやうに喜んで、

「如何な譯か、今朝からかやうな目に遭はされて、唯あなたのお出をのみお待ち申しました。平治の亂に殺さるべき處をお助けに預り、其の上正二位大納言にまで經上り、年も四十を越えました。御恩のほどは生々世々に報じかねまするが、どうか此度もお助けを願ひます。命さへ助かりますれば、出家を致し、如何なる山奥にも引籠り、後世菩提の勤めに一生を送りませう。」

重盛はこれを聞いて、
「いや、お命を縮むるまでの事は御座りますまい。萬一の場合は此の重盛が身に代へてもお助け申しませう。御安心あらせられい。」

と慰めて置いて、父入道の前へ行つて、
「あの、大納言を殺すことは能く、御分別なされませ。先祖の修理大夫顯季が白河天皇に召使はれた以來の名家で、特に今は正二位大納言の高位に上つてお上の御寵愛も深い人、左様の人を、我が家に仇をなせばとて、妄に殺すとい

ふことは宜しく御座りますまい。都の外に遣はされたらそれで事は足りる
と存じます。昔は菅原道真や源高明の如き人すら讒言に因つて流罪に處
せられた事あり延喜の聖代安和の御門の御缺典として今に申傳へられます
る。賢王にすら御誤りあらせられるまして凡人には如何様の誤りが無いと
も限りませぬ。既にお召捕りになつた上は急いで殺さずとも何も恐るべき
事は御座りませぬ。刑の疑はしきをば軽くせよ功の疑はしきをば重くせよ
といふ古語も御座ります。』

清盛は聞いて濼い顔をしてゐる。重盛は繼いでいふ。

「或が私が大納言の妹を維盛に娶らせてゐる縁故からかやう申上げると思召
すかも知れませぬが君の爲め國の爲め世の爲め家の爲めを思ふの外は御座
りませぬ。先年少納言入道信西が執權時代に嵯峨天皇の御時藤原仲成を誅
せられし以來保元まで二十五代の間断えてゐた死刑を行ひ左大臣頼長の死
骸を掘り出して實檢せられたのは餘り甚しい儀かと存じました。昔より人
を死罪に行へば謀叛人が絶えぬと申しますが果して中二年過ぎて平治に

は又世が亂れて土中に埋れて置れてゐた信西が掘り出され首を刎ねられて
萬人の目に曝されました。信西が保元に爲たことが幾程もなく自らの身上
に報いられたといふのは實に恐しいことだと思ひます。特に此度の事件
は朝敵と申すではなしかたゞ重刑に及びますまい。假に父上の御榮華に
は關ぐる事もあらせられませぬ。此上は子々孫々迄平家繁昌の事が望まし
いとは思召しませぬか。積善の家には餘慶あり積悪の門には餘殃あり父祖
の善悪は必ず子孫に及ぶものや、今夜大納言の首を刎ねられることは宜
しからぬと存じます。』

と熱心に説いたので清盛入道も成程と思つたのであらう成親を殺すことは
見合せとなつた。

父入道の前を引下つた重盛は中門に出て侍どもに。
「仰せが有つたさてあの太納言殿を殺し申す事はならぬぞよ。父上もお腹立
ちまぎれに爲さつた事は後にきつと御悔みなさるに違ひない。彼等も間違
つたことをして後悔せぬが好い。」

と云ひ聞かせた。嚴めしげに武裝して居た侍どもは、これを聞いて恐しさに
慄おそひ上あつた。

「特に經遠つねのほと兼康かねやすとが大納言殿おんごを手暴あつに扱あつたのは眞まことに怪けしからぬ。なせ此こ重盛しげもりが耳みみに入はいつた後のことを考かんがへなかつたのぢや。田舎侍いなかざむらいは皆みな其そのの様なやうのぢや。」

と重盛しげもりに叱責しかられて難波なんばも妹尾いせも恐入おそつてしまつた。

やがて重盛しげもりは小松こまつの邸やしきへ立ち歸かへつた。

一方いっぽう成親なりちかの供ともをした侍ざむらいどもは中御門なかつかど烏丸くわまるの新大納言しんたいごんごんご邸やしきに驅かけ戻もどつて委細わいさい申まを述のべる。と奥方おくがたを初はめ女中にようぢゆう達は聲こゑを立て、泣伏なみふした。

「少將殿せうしやうどのを初はめお子供おこども方もお召捕めいしほりになるやうな評判ひやうばんで御座ござりまする急いそいで何方どこへかお逃にげになる方が宜敷よろう御座ござりませう。」

と侍ざむらいどもは口くちを添そへた。

「かうなつても安穩あんゑんに生いきながらへようとは思おもはない。でも今朝けさを限かぎりのお別わかれと知らなかつたのが悲かなしい。」

と奥方おくがたはたいもう泣なくばかりであつた。

六波羅むつろ勢せいが押寄おしよせたといふ知らせが來きた。でも捕とらはれて憂目うれめを見るよりはと奥方おくがたは十歳じふさいの姫君ひめぎみと八歳はつさいの公達きんたつとを車くるまに載のせて、北山きたやまの雲林院うんりんいんへ落ちのびとある僧坊そうぼうに入はいることゝなつた。其處そこまで見送みおくつた召使めいしの者ものどもは暇乞いひまごひして思おもひくゝに引取ひきとつた。

あとには頑ごんはない姫君ひめぎみと公達きんたつと、その外ほかには話はなし相手あひて一人ひとりもない奥方おくがたの心こころは哀あはれなものであつた。暮くれれ行く日影ひかげを見るにつけても、大納言たいごんごんごの露つゆの命いのちも此夕このゆふ限かぎりかど涙なみだが溢あふれ出る。

新大納言しんたいごんごんご邸やしきにはまだ侍女じよな達たちや侍ざむらいどもが居残ゐのこつてゐたけれど、食事しょくじもせず門かども締しめず、廐うまやの馬うまに飼葉かひはをやる者ものすらなかつた。

昨日きのうまでは夜よが明あくれば門かどには馬車うまぐるまが立ち並び、室むろには賓客ひんかくが列りなり、遊あそびたはむれて日をくらし、憂うれき世よの憂うれさも知らず、召使めいしふ者もの共ともには惶おそれ敬うやまはれて物ものも高聲たかこゑでは云いはないほどであつたのに、夜の間に變かつた盛者しやうもの必衰かならずの理ことわり今日けふはしみじみと、「樂たのみ盡つきて哀あはれ來きる」との江相公かうしやうこう（音人ねんじん）の句くが思知おも知られるのであつた。

少將乞請

丹波少將成経は、院の御所の宿直をしてゐたので、留守の間にこんな出来事が起つたことは、少しも知らずにゐたのであつたが、大納言の侍どもが院の御所へ駆けつけて、斯うく少將へ知らせたので、

「かやうな大事件を宰相からなせ、今まで知らせがなかつたらう。」

と云つてゐるところへ、宰相から使者が来た。

宰相といふのは、清盛の弟教盛で、少將の舅である。六波羅の惣門の脇に住んでゐるので、門脇の宰相と呼ばれたのである。

宰相の使者はかう云つた。

「何事か知りませぬが、今朝西八條のお邸から、きつとあなたをお連れ申せといふことで御座りまする。」

少將は領きながら、近習の女官達を呼び出し、

「昨夜何となう物騒しかつたのを、例の山法師が又下つて来たのかと、餘所事し

思つてゐましたら、わが身上に大難が迫つて御座りまする。今日の夕方大納言が斬られるといふ事なれば、此の成経も同罪で御座りませう。今一度御前へ參つてお暇乞ひ申上げたう存じまするが、かう云ふ身になりましては、多うて差控へまする。」

と云つたので、女官達は驚いて急いで法皇に此の旨を申上げた。

今朝清盛が使者の口上で、法皇は既に密謀露顯に及んだことを御承知になつてゐたが、今一度これへ少將を御前へお召しになり、少將の顔を御覽あらせられ、たゞ涙をお流しになるばかりで、一言のお言葉もなかつたので、少將も涙に咽んで何と申上げることもなく、やがて退出した。

法皇は少將の後姿をお見送りになりながら、

「情ない世の中や。これ限りで又少將を見ぬのであらうぞ。」

と仰せられて、御涙が止度なく落ちる。

少將が御前を退出すると、御所の人々や、局の女官達も名残を惜しんで、少將の袖を取つて諸共に泣いた。

成経は舅教盛の邸に行つた。成経の妻は臨月が近いので實家に歸つてゐたが、今朝からの歎きに命も消えるばかりであつた。成経は此の有様を見ていよいよ哀しさが堪へられない。

此の少將の乳母に六條といふ女がある。少將が誕生以來二十一年間、八時も少將の傍から離れずに、何彼と少將の面倒を見てゐたのであるが、少將の姿を見るなり、

「乳の中から育て申した此方、吾身の年の行くのも忘れて御成人を樂み時に御所からお歸りの遅いのにさへ、お案じ申しましたに、今度はどの様な憂上にお逢ひになることやら。」

と云つて泣く。少將は、

「その様に歎くことは無い。宰相殿が御座るからには命は助けて下されうよ。なご、慰めたけれど、六條は人目も耻ぢす悶え泣く。」

さうする中に、西八條から催促の使者が度々來るので、教盛は、
「兎も角も行かう。其上での事ぢや。」

と、成経と共に車に乗つて邸を出た。

西八條近くへ行つて、先觸れの使者を出して見ると、門の内へ少將を入れてはならないといふのである。そこで成経は其邊の侍に渡して置いて、教盛だけ門の内へ入つて行つた。

六波羅の武士どもは、嚴重に成経を取圍んで警戒した。頼みに思ふ舅の教盛と別れて、六波羅勢に取巻かれてゐる成経は、ごんなに心細かつたであらう。

教盛は中門に行つて待つてゐたけれども、清盛入道が逢はうと云はない。止むなく源太夫判官季貞を以て、かう云はせた。

「教盛こと由なきものと縁組を致して後悔千萬に存しまするが、致方も御座りませぬ。嫁はした娘は此頃病氣で居りましたところに、今朝よりの歎きで病勢重り、最早命はむづかしう御座ります。教盛が居ります以上、決して都合は致させませぬ、何とぞ成経をば暫時の間、私にお預け置きを願ひまする。清盛入道はこれ聞いて、

「何ぢや。馬鹿なことを申す。」

と呟いて暫く黙つてゐたが、良あつて聲荒らげ、

「新大納言成親以下近習の人々、我が一門を亡ぼして天下を亂さんとの陰謀を企てゝゐる。少將成親は大納言の嫡子であるによつて、親疎に關せず許すことは相成らぬ。若しこの謀叛が成就したとしたら其許とて安穩で居られうか。」

と斯う云つた。季貞は中門へ歸つて此由を教盛に取り次ぐと、教盛はいかにも失望の體で重ねていふやう。

「保元平治以來、度々の合戦に臨む毎に御命に代る覺悟を以て働きました私。此の後とても暴き風には真先に立つて防ぎ申す心得で御座ります。縦ひ教盛は老年に及んだりとも、若き子供が幾人も控へてをりますれば、きつと一方の防ぎには爲らうと存じます。それに暫く少將をお預り致したいと願ひ出るを御許しなきは、この教盛を二心あるものと思召されての事で御座りませう。左程御信用が無ければ世に在る甲斐も御座りませぬ。御暇を頂戴して出家致し、高野粉河になりとも世を遁れて、後世菩提の勤を致しませう。世

にあればこそ望もあり、望叶はねばこそ怨恨も生ずる、浮世を捨て、佛に仕へるが最上の道で御座りませう。」

季貞は、また清盛入道の許に行つて此通りを取次いだ上、

「宰相殿は最早御覺悟なされて御座ります。少將の事は如何様にも御意任せに御處分あらせられませ。」

と云ひ添へた。それを聞いて、

「いや、出家入道までとは其は餘り穩かでない。然らば少將を暫く教盛に預ると申せ。」

教盛はやつと望みが叶つて喜びながらも、

「あゝ、子どいふものは有つまいものぢや。我子の縁に惹かれずば、これ程までの心配はなかつたらう。」

と歎息しつゝ、中門を出ると、先の處に侍共に取り圍れながら、教盛の退りを待兼ねてゐた成親は、

「如何な御都合になりましたらう。」

「いや、以ての外の御立腹で、此の教盛に對面も許されず、願ひの筋も断じて許さぬと言はるゝにより、然らば拙者は出家入道致さうとまで申した。其の爲か遂に、其許を暫く教盛に預けおくとは申されたが、それも果して何時までのことやら末が案じられまする。」

「では、お蔭を以て當分私の命に別條はありませぬな。其に就けても父大納言の身の上は何と爲りますで御座りませう。」

「いや、其許の事を漸う／＼申して參つたぐらゐること、大納言殿のお身の上までは思ひも寄らなかつた。」

成經は涙をばら／＼と流して、
「私が命を惜みますすのも、父に今一度逢ひたいからで、若し今夜父が斬られまするならば成經命長らへたとて何になりませう。生きるも死ぬるも父と同じ様になるやう言つて戴きたう御座りまする。」

「其許の事に就いてばかり種々申して參つて、父君の事までは考へが及ばなかつたので御座るが、今朝ほど小松内大臣(重)の執成して其も暫くは安心の出來

る様子に承つて居りまする。」

と聞きもあへず、成經は、手を合せ嬉し泣きに泣く。子でなくば、誰か我身に掛かる大難をも忘れて、かほごまで悦ぶものがあらう、人情の誠は親子の中にあるもの、——有つべきものは子である。

やがて、教盛成經の二人は、今朝の如くに同車して、宰相邸へ歸つて行つた。奥方達は申すに及ばず、女中侍共に至るまで、死んだ人が甦つたやうに悦び泣をするのであつた。

教訓

清盛入道はかやうに多くの人々を監禁しても、まだ満足が出来なかつたと見え、赤地の錦の直垂の上に、黒絲威の腹巻を着し、白金物打つたる胸板を當て、先年安藝守たりし時、嚴島に參詣し、靈夢を蒙つて大明神より賜はり、常も枕頭を離さなかつた小長刀をば脇に挟み、威風堂々と中門の廊にゆるぎ出て、高聲に「貞能」と呼んだ。

筑後守貞能は早速御前に罷出た、木蘭地の直垂に緋威の鎧を著てゐる。

「如何に貞能保元には叔父忠正を初めとして一門大方新院(崇徳)にお味方申した。一の宮重仁親王(崇徳天皇)は父忠愍卿のお育て申された方なるによつて、旁々彼方に参るべき處を、故院(鳥羽)の御遺言を守つて、この淨海は官軍(其時)は(今皇)に馳せ加はり真先かけて戦うた、これが一つの奉公。次に平治元年十二月、信賴義朝が謀叛の時には院(法今皇)を奉じて宮城に楯籠り、天下は暗闇となつたなれど身を惜まず働いて遂に逆徒を撃退して、經宗惟方を召捕るに至るまで、君の御爲め淨海が命を失はんとしたことは度々である。されば、縦ひ何人が何と申上げようとも、七代までは我が一門をお見捨てあるまじきことである。然るに成親西光などの如き無能下劣の輩を御信任あつて、動もすれば我が一門を亡ぼさうとの思召は、甚だ以て心外に堪へぬ。此後とても讒奏するものがあるに於ては、當家追討の院宣をも下させられるに違ひない。朝敵と呼ばれた後にいくら悔いても及ぶことではない、天下の亂を防ぐため、暫く法皇を鳥羽の北殿へお移し申すか、さもなければ此の六波羅へ御幸を仰ぎたいと

思ふのぢや。其に就いては北面の武士どもといづれ一軍は免かれまい。早く侍どもに其の用意申付けい。法皇への御奉公は淨海もう眞平ぢや。さあ、馬に鞍置け、鎧を出させい。」

清盛入道が嚴命に邸内忽ち大混雜となつた。主馬判官盛國は、小松殿へと驅付けて、

「大變で御座る。大變で御座る！」

内大臣は聞きも敢へず、

「大納言殿の首打られたのぢやな。」

「其儀では御座りませぬ。入道殿は鎧を装はれ、侍どもも皆武装して、唯今法皇の御所へ押寄せられんとするところで御座ります。天下の亂を防ぐため、暫く法皇を鳥羽の北殿へお移し申すか、さもなければ六波羅へ御幸を願はうとの仰せで御座りましたが、其實鎮西へ流し奉らうとの御所存かと存せられま

する。」

教訓

益

内大臣は、心中まさか左様のことはと思ひながらも、父が今朝の態度では或

は左様な狂氣じみた行がないとも限らぬので、直様西八條へ車を飛ばせた。
折りしも清盛入道は腹巻を着けて坐り、一門數十人の大官は色々の直垂に思
ひ／＼の鎧を着て、中門の廊に二列に居流れ、其より以下何々の守何々の尉とい
ふ様な面々は、縁から庭一面、薙々ど並んでゐる。冑の緒も締め、馬の腹帯も締め
て、旗竿など押立て、今にも出陣の景色である。

其處へ小松内大臣が、烏帽子に直衣、大臣の常の服で、歩調徐かに悠然として入
つて来た。清盛入道伏目にこれを見て、「わざとらしい奴ちや、窘めてやらう」
と思つたが、子とは云ひながら、禮儀正しい内大臣に、物騒な姿で逢ふのもきまり
が悪く、少し障子を締めさせて、周章して、衣を引つ纏けたが、胸板の金物がきらき
らと、咽喉の下から光るのを、衣の襟を掻き合せ、押し藏さうとする様子が如
何にも氣の毒であつた。

内大臣は、つと弟宗盛の上座に着いた。暫しは雙方とも無言の儘である。
良あつて清盛入道は口を開いた。
「成親の謀叛の黒幕は法皇で在らせられる。暫く世を静むるため法皇を烏羽

の北殿へお移し申すか、或は此處へ御幸を仰ぐか致したいと思ふが如何」
内大臣は之を聞くと、さし俯向いて、はら／＼と落涙した。清盛入道は呆れて、
「何とした、如何致した。」

内大臣はやゝあつて涙をおさへていふ。

「其のお言葉を承つて御運も最早末と存じます。運命の盡きんとする時人
は必ず悪事を思ひ立つもので御座ります。又御様子を拜しまするに正氣
の御沙汰とは思はれませぬ。昔より今に至つて太政大臣たるものが甲冑を鎧
ふといふは絶えて禮法に無きこと、殊に出家の御身分にして其の御有様は破
戒無慙と申すもので御座りませう。世には四恩ありと申す、即ち天地の恩、國
王の恩、父母の恩、衆生の恩。其中に最も重きは國王の御恩で、普天の下卒士の
濱王地に非ざるはなく、如何なる聖賢も王命には従ふが、人臣の義で御座りま
する。今や我が一門の所領は全日本の半を越え、父上には先祖に例なき太政
大臣、無才闇愚の私さへ内大臣の位に登つて居ります。此上もなき朝恩で
は御座りませぬか。然るに其の朝恩を忘れて、法皇に對し奉り、非禮の振舞を

510

なされては、天照大神正八幡の神慮にも背きます。我が一門は代々朝敵を平げて無雙の勳功を建て、居りまするけれども、其の勳功に誇ることは全く傍若無人とも申されませう。法皇の思召すところも御道理が無いとは申されませぬ。併し平家一門の運命未だ盡きざるために御計畫も露顯に及び、主謀者たる成親卿を監禁なされました上は、法皇如何に思召すとも恐るゝには足りませぬ。此上は速かに相當の御處分あつて、君にはいよ／＼奉公の忠勤を盡し、民には撫育の哀憐を施し、神明佛陀の加護冥助をお祈りなさるが宜敷う御座りませう。其の中には君の御心も解けさせられぬことは御座りませぬ。併し強ひても御出陣あるとならば、父子の情に依つて君臣の義は滅せられませぬ。平素重盛が身に代り命に代らんと心掛けてゐる者も少々は御座ります。是等の者召し連れて重盛法皇の御所を守護し奉ることになりましたならば、以ての外の大事故となりませう。誠に悲しい場合に相成りまして、御座りまする君に盡さんとすれば、不孝の子となり、不孝の罪を遁れんとすれば、不忠となる、重盛進退窮まりました。此上は何時まで生きて世の亂れ

を見るに忍びませう。重盛が首を御刎ねあれ。あゝ末代に生れ合はせたが私の不運で御座りまする。」

と直衣の袖も絞るばかりに泣くのを、居並ぶ平家一門の人々も皆貰ひ泣きをした。

烽火

清盛入道は、の有様を見て、

「いや／＼其ほどまでの事では無い、悪黨どもの謀叛に與みさせられて、如何なる變事が出来にも及ばうかと、これを氣遣つたのであつたからぢや。」

とさも／＼落膽した様子であつた。内大臣は、「縦ひ如何やうな變事が出来致すとも、法皇を何とかなされるといふ事はなりませぬ。」

と云ひながら、ついと立つて中門に出て、侍共に對し、「唯今此で申したことを汝等も承はつたであらう。御出陣の御供は重盛が首

打たれるを見た後にせい。」
 斯う云ひ捨て、小松殿へ歸り、主馬判官盛國を召して、
 「天下の一大事を聞き出して參つた。我が命に従はんとする者は、武装して集
 れど觸れまはせ。」

其の通り直に言ひ觸らすと、滅多なことには騒がぬお方のかう云ふ命令のあ
 るのは深い仔細があることだらうと、淀羽東師、宇治岡屋、日野勘修、寺醍醐、小栗栖
 梅津、桂、大原、志津、原、芹生など、方々の里にゐる平家の武士ども、我おくれじと周章
 て騒ぎ、鎧だけ著て冑を著ぬもの、矢を負うて弓を持たたぬものさへある。我も我
 もと片鎧踏むや踏まずで馳せ集つた。

西八條に集つたゐた數千騎の兵も亦、小松殿で軍勢を催されると聞き、清盛入
 道には届けもせでざわ／＼と渦を巻いて皆駟付けた。残つたものはたゞ筑後
 守貞能唯一人であつた。

清盛入道はその貞能を呼んで、
 「内大臣は何と思つて軍兵を集めるのぢや。今朝云つたやうに此處へ討手を

向ける心かな。」

はら／＼と貞能は涙を流して、

「決して左様なことは御座りませう。今朝此處で仰せられたことを御後悔
 あつての事で御座りませう。」

と云つたけれども、清盛は左様は思はない。兎に角、重盛と仲違ひしては悪いと
 考へて、法皇を迎へ奉らうといふ心も和らぎ、急いで腹巻を脱ぎ捨て、素絹の衣に
 袈裟打掛けて心にもない念佛など唱へてゐた。

小松殿では、盛國が承はつて到着者を書き附ける。暫のうちに馳せ參じた侍
 どもが一萬餘人にも達した。

内大臣は到著簿を一覽の後、中門に出て侍どもに向ひ、

「日來の契約を守つてかやうに速かに集つて呉れた段は満足に思ふ。支那に
 かういふ話がある。周の幽王に褒姒といふ最愛の后があつた。褒姒は天下
 第一の美人であつたが、一度も笑つたことがない。これだけが幽王の遺憾であ
 つた。其の頃の規則として、天下に兵亂が起る時は、烽火と云つて所々に火を

揚げ太鼓を叩いて軍兵を集めることゝなつてゐた。或時天下が大に亂れたので所々に烽火を揚げた。褒姒はこれを見て「澤山な火ではある、火があれば多いとは思はなかつた」と初めてにつこり笑つて見せた。そこで幽王は褒姒の笑顔を見たくなると、時を選ばず直に烽火を揚げさせる。烽火が揚ると國々の軍兵が驅付け來て見ると何等の變もないので其儘引返す。それが度重なる後にはいくら烽火を揚げても例の戯れと心得て誰も集まらない。然るに或時隣國より賊徒が起つて幽王の都に攻入つた。すはやと烽火を揚げさせたが、一人の軍兵も集らず、幽王は終に亡びてしまひ褒姒は狐の正體を現はして逃去つたといふ。これは支那の物語であるが、今後今日のやうなことがあつたならば皆此の通り速かに驅集つて參れ。今朝重盛、天下の大事を聞き出して、皆を呼び集めたが、更に精査するに虚報と云ふことが判明した。もはや一同引取つて宜敷い。」

やがて軍兵共は悉く解散した。重盛は其實何事も聞き出した譯ではなかつたのだが、萬一の時ざれだけの召集が出来るかを知るため、一つはかうして父清

盛の心を威壓的に鎮め和らげんとすの謀計であつたのである。内大臣のこの所爲は、

「君君たらずと雖臣以て臣たらざるべからず。父父たらずと雖子以て子たらざるべからず。君の爲には忠あつて、父の爲には孝あれ。」

と古人の格言通りであつた。

法皇もこれを聞召されて、

「今に始めぬ事ながら、怨をば恩を以て報ゆる重盛が心は辱けない。」

と御感心遊ばされたといふのである。

新大納言流され

六月二日、この日は新大納言成親が都を逐はれる日であつた。

新大納言を賓客の席に著かせて、膳部を供したが、胸塞がつて箸も取られなかつた。

警護の武士難波次郎經遠は、車の用意が出来たので疾くくとせき立てる。

新大納言は心ならずも車に乗った。切めて今一度小松殿に逢ひたいものと思つたが、それすら叶はない。

車の前後は軍兵どもに取圍まれてゐた。新大納言は誰か身内の者が無いかと見廻したが、一人もゐなかつた。「縦ひ重罪に依つて遠國へ流されるにせよ、家來の一人ぐらゐは附けられさうなもの。」と車の中で歎息するのを見て、護衛の武士ども、哀れに思つた。

西の朱雀を南へ行くとき、其處から宮城が見える。新大納言は車の中から伏拜んだ。

年頃見慣れた宮中の下役や牛飼どもまで、今日新大納言が流されるのを見て、皆涙を流した。まして奥方や幼ない公達姫君の心の中は、思ひやるだに哀れであつた。

鳥羽の南の門を出て、其處からは舟である。

「どうせ殺されるものならば、都近いこの邊で殺されたい。」

と新大納言は云ひながら、護衛の武士の名を聞くとき、「難波次郎經遠で御座る」

と答へた。

「若しこの邊に身内の者が來てゐるなら、舟に乗らぬ前に、一言云ひ残して置きたいことがある。」

經遠は方々驅け廻つて探したが、一人も來てはゐなかつた。大納言は涙を流して、

「我れ世に時めいた頃は、一二千人は我に隨うた者もあつたらうに、今見送つて呉れるものが一人もないとは情ない。」

と云ひながら、大幕を引渡した屋形舟に乗つた。熊野詣天王寺詣などには、美しく飾付けた樓船に乗り、供の船二三十艘も引連れて行つたのに、今は何の裝飾もない屋形舟に乗つて、荒くれ武士に圍まれて、波路遙かに流されて行く。新大納言の心の中は、どんなに悲しいであらう。

その日、新大納言は攝津國大物の浦に着いた。明る三日の日、大物の浦へ都から使者が來た。

「此處で殺せよとの命令であらうがな。」

と新大納言は尋ねたが、さうではなくして、備前國兒島へ流せよとの使者であつた。死罪に行はるべき新大納言を流罪に處せられたのは、内大臣重盛の執成しによるのである。

新大納言には、別に内大臣から、

「如何にもして都近くへお置き申したいと、盡力して見ましたが叶ひませす、誠に甲斐ない事と存じます。併しお命だけは確かに乞請けました、御安心あらせられよ。」

この書面、猶難波次郎へも「十分氣を注げてお仕へ申せ、御心に違ふやうなことがあつてはならぬ」とあつて、尙ほ旅中の用意など細々と記してあつた。

新大納言は、

「法皇を初め奉り戀しい妻子とも別れて、何處へ行かねばならぬのか。再び都へ歸つて妻子と逢ふことも叶ふまいに。」

と悲しみながら、明る四日船出して、日敷を重ねて、備前の兒島に著くと、護衛の武士は新大納言を、とある一軒の民家に入れた。島の習ひとして後は山前は海

磯の松風浪の音何れも哀れは盡きなかつた。

阿古屋松

流罪に處せられたのは、新大納言ばかりではなかつた。近江中將入道運淨は、佐渡國山城守基兼は、伯耆國武部大輔正綱は、播磨國宗判官信房は、阿波國新平判官資行は、美作國へ流された。

清盛入道は、其頃福原の別荘にゐたのであるが、二十日の日、攝津左衛門盛澄を門脇宰相教盛の邸へ遣はして、

「かねて預け置いた丹波少將を渡されたい。所存がある。」

と傳へさせた。教盛は、

「先達西八條へ召された時如何やうにも處分されたら、却つて諦めも好かつたらうに、改めて又心配を掛けるのは可哀相ぢや。」

と思ふけれども、約束なれば致方なく、少將を呼んで福原行き支度をさせた。奥方や女中達は叶はぬまでも、入道へ今一應のお執成しを願つたが、教盛は

唯かう言ふばかりであつた。

「云ふだけのことは既に云つてある。此上は出家するより外はない。今になつて又何と云はうぞ。縦ひ何處の浦に流されることになつても生きてゐる間は訪ねて上げる考ぢや。」

少將には三歳になる若君があつたが自分もまだ壯い身だから平生はさほど子供の事など氣にもしなかつたが、今はの時になつて見ると、流石に懐しくて今一度見たいといつて、乳母が抱いて來た若君を膝の上に抱上げて、髪を撫で、

「七歳になつたら汝も、御所へ宮仕へをさせようと思つてゐたが、是非もない。若し命長らへて成長したらば法師になつて我が亡き後を弔うて呉れや。」と云ひ聞かせる、何の聞き分ける筈はないけれど、若君が打領いたので、それを見た少將初め、奥方も乳母も女中達皆共々に袖を濡らした。

「早くお支度なされ。今夜は鳥羽までお出になるので御座る。」と清盛の使者が追き立てる。成経は「せめて今夜だけ都で明したい。」と云つて見たが、聞入れなかつた。

少將は是非なく宰相邸を出て鳥羽へと出立した。

越えて二十二日福原へ著いた。清盛入道は備中國の住人妹尾太郎兼康に命じて、少將を備中國へ流させた。

兼康は教盛に憚つて、道すがら様々と勞つたが、少將は少しも心慰みはせて、ただ朝夕唱名して、父大納言の無事を祈つてゐた。

備前國の兒島に流されてゐた新大納言成親は、餘り舟著が近いといふので、間もなく備前備中の國境庭瀬の郷吉備の中山有木の別所といふ山寺に移された。此處は成経がゐる備中の瀬尾と、僅か五十町しか隔てゝゐなかつた。

ある時成経は兼康に對し、
「父上のおいでになる有木の別所とかへは如何程あるぞ。」
と尋ねると、兼康は有様に云つては悪からうと、
「片道十二三日の道程で御座ります。」
と答へた。少將は涙を流して、
「昔日本は三十三ヶ國であつて、後に六十六ヶ國に分たれたのぢや。この備前

備中備後も元は一國東の出羽陸奥も昔は六十六郡が一國であつたのを十二郡を割いて出羽國と定められた。あの實方中將が奥州へ流された時其國の名所阿古屋の松を見んものと方々を尋ね廻つても尋ね當らず空しく引返さんとする途中一人の老翁と行逢つた。中將は老翁を呼び止あ「汝は老人のことなれば定めて當國の阿古屋の松といふ名所を知つてゐるであらう」と問ひかけると「當國には御座りませぬ大方出羽國で御座りませう」と答へたので「さては汝も知らぬ國の名所が忘れられるとはあゝ世も末となつた」と歎息しながら行過ぎようとする時老翁は中將の袖を控へ、「君は、

「陸奥の 阿古屋の松に 木隠れて

出づべき月の 出でもやらぬか。」

といふ歌の心を以て當國の名所阿古屋の松はとお尋ねなされるか。この歌は昔出羽陸奥が一國であつた時詠まれた歌で其後十二郡を割いて國が二つとなつてからは阿古屋の松は出羽國の内に御座りませう。」と知らせた。それではと實方中將は更に出羽國に行つて阿古屋の松を見たといふことぢや。

汝は有木の別所まで片道十二三日の道程ぢやと云ふけれど筑紫の太宰府から腹赤の使（年毎の節會に）が都へ上るのを歩路十五日と定めてある。遠いと申しても備前備中備後の間に三日以上の道程がある筈はない。恐らく父上のおいでになる所を成經に知らせまいために近い所を遠いと云ふのであらう。」

其後二度とは尋ねようとしなかつた。

新大納言死去

法勝寺の執行俊寛僧都丹波少將成經平判官康頼の三人は薩摩瀧の鬼界が島に流さるゝことゝなつた。鬼界が島は鳥も通はぬ絶海の孤島に住む人はあるけれど著る着物がなく何時も裸であるために身には毛が生え牛よりも色が黒い。男は烏帽子も著てゐないし女は髪も下げてはゐない。話す言葉も内地人には更に通じない。耕作の道を知らない島人は米穀蔬菜を得る能はず魚鳥を捕へて常食としてゐる。島の中には絶えず火を噴く高い山があつて硫黄が至

る所に充滿して居る。そこで此島を硫黄が島とも云ふのである。山の上には常に雷が鳴上り鳴下り麓には雨の降る日が多い。

新大納言成親は我が子少將成経が此の恐ろしい鬼界が島に流されることになつたと聞いて、今はこれまでぞと思ひ切り出家致したいといふことを、重盛まで申し遣はしたが、やがて法皇に伺ひ濟みの上許された。

新大納言の奥方は其頃都の北山雲林院の附近に忍んで、涙ながらに其日くを暮してゐた。舊は召使ひの男女が澤山居たのであつたけれど、今は世間を憚かつて出入りをするものもない、たゞ一人源左衛門尉信俊といふ侍だけが心ある男で、絶えず訪ねて来ては慰める。

奥方はある日信俊を招いて、

「殿には此程まで備前の兒島においでになつたが、近頃は有木の別所とかへお移りになつたといふこと、何とかしてお便りを申上げもし、御返事をも頂きたいと思ふ、好い分別はないか。」と申されると、信俊は涙を流し、

「御尤で御座ります。私も幼少の頃より深い御恩を受け、片時も離れず御奉公申しましたれば、御召なされたお聲御訓戒のお詞など、今も耳に残つて忘れも致しませぬ。西國へお下りの時、お供申上げたいと願ひ出でましたけれど、六波羅のお許しがなかつたので御座ります。今度こそは如何様な憂目に逢ひませうとも、御文を戴いて行つて参りませう。」

奥方は大に喜び、細々と文を認め、若君姫君にも別々に認めさせて、信俊に渡された。此より信俊は、遙々と備前國有木の別所へ下り、先づ預りの武士難波次郎経遠に面會した。経遠は信俊の忠義の心に感じて、直に成親のところ案内した。

新大納言成親入道は、今しも都のことを考へて歎き沈んでゐたところに、都から信俊が参つたと聞き、夢かさばかり喜んで、

「これへ〜。」

といふのであつた。信俊は傍近く進み寄つて見ると、棲居の粗末なのは兎も角さしも美しく氣高かつた昔の姿に引きかへて頭は圓めて身には墨染の僧衣

其のあはれさに目もくれ心も消えて涙が留めどなく出る。やう／＼に涙をおさへて奥方より此度仰せつかつた次第を細々と物語り、さて彼の文を取出して差上げた。奥方の文には心細い悲しい生活の有様など詳しく記し、

「幼き人々の餘りに戀ひ悲しみ給ふ有様我身も盡きぬ物思ひに堪へ忍ぶべうもなし……………」

なごいふ文句もあつた。目のあたり筆の跡を見れば尙ほ戀しさがいやまさつて兼ねての物思ひは之に比べては物の數でもなかつた様に思はれるのである。

四五日経つて信俊は、

「お傍へ居りましたして何時までも御奉公が致したう御座りまする。」

と願つて見たけれども経遠が其は到底許さるべき事でないと言ふので成親入道は、

「どうせ何日までも居られるのぢやない早く歸れ自分は恐らく近々に殺されるであらう。死んだと聞いたら我が後世を弔つて呉れい。」

と奥方への返書を認めて信俊に渡した。信俊は返書を懐に納め、

「又御機嫌伺ひに参りませう。」

と暇を告げると、

「汝が又來る日が有らうとも思はれぬ。」

入道は斯う云ひながらも餘りの名残惜しさに、行きかける信俊を幾たびも呼び返し／＼した。

いつまでさうしてもゐられないので、信俊は涙を抑へながら入道に別れて都へ歸り、返書を奥方へ差上げた。返書の中には、出家をした時に切つた一房の髪を巻込んであつた。

奥方は二目とも見ない。見れば又悲しさをそゝられる形見こそ今は怨しい顔を伏せてしまひ、若君、姫君は聲を立て、泣き叫ぶ。

八月十九日に至つて、大納言入道は遂に有木の別所で殺されることゝなつた。最初は酒に毒を入れて進めたけれども利かなかつたので、二丈ばかりもある崖の下に尖柱を植て、崖の上から突落した。成親入道はその尖柱に貫かれて落

命したのである。例少い無残な死かたであつた。

このことが奥方の耳に入ると、

「今一度お逢ひ申したいと思へばこそ、今日まで尼にもならなかつたが、もう此上は。」

と菩提院といふ寺に入つて、頭をおろし、日々亡夫大納言の菩提を祈られた。

この奥方は山城守敦方の娘で、後白河院の御氣入で美人の聞え高かつたのを、御寵愛深い新大納言に下し賜はつたのである。

奥方出家の後、若君も姫君も菩提院に籠り、花を手折り水を掬んで亡き父君の後世を弔はれた。

徳大寺殿島詣

徳大寺大納言實定卿は、曩に清盛の次男宗盛に大將を先んせられて、暫く世の成行きを見るとき、大納言をも辭して籠居してゐられたが、其後出家をすると云ひ出されたので、御内の者は誰彼となく歎き悲しんだ。

その中に藤藏人大夫重兼といつて、諸事に行き渡つた者がゐた。ある月の夜、徳大寺殿が唯一人、南面の格子を上げさせ、月を眺めてゐるところへ参上した。

「誰か。」

「重兼で御座りまする。」

「この夜更けに何の用ぞ。」

「今夜はあまり月が佳いので伺ひました。」

「好く参つた。今宵は何となく心細く徒然に思うてゐた。」

と徳大寺殿は重兼を相手に暫く古今の物語などあつて後、

「つらく平家繁昌の有様を見るに、嫡子重盛は次男宗盛と左右の大將である、

三男知盛孫の維盛など、彼も是もと次第に昇進せば、他家の人々は到底大將に

なる時は有るまい。もう世の行末は見えずいたに依つて、自分は出家を致す

心得ぢや。」

藤藏人はこれ聞いて、

「萬一御出家をなされましたら、御内の上下悉く途方にくれませう。それに就

いて重兼近頃名案を思付きました。其れは安藝の嚴島へ御参詣のことで御座ります。彼の嚴島は平家一門が一方ならず信仰する社で、内侍といふ美しい舞姫が数多居ります。御参詣をなされたら、彼の内侍達珍らしがつて、厚き御待遇を申上げるで御座りませう。若し「何を御祈誓のための御参詣か」と尋ねましたら、有りのまゝを仰せ置かれてお歸りの時に主立つた内侍を一兩人都までお連れなされませ。さすれば、内侍は必ず西八條へ伺候致しませう。何事で上京したかと清盛入道は尋ねずにはおかれませ。内侍は有りのまゝを申すで御座りませう。即ち御祈誓の趣が入道殿の耳に入り、まする、入道殿は好奇な人ゆゑ、案外好都合にならうかと存じます。此は思ひつかなくつたが妙案だと徳大寺殿は早速同意して、俄かに準備を整へ嚴島へ参詣した。

嚴島には如何にも美しい舞姫が多くゐた。「當社に平家の公達以外の公卿方の御参詣は珍らしい」と言つて大騒ぎをし、主立つた内侍十餘人、夜晝附添うて鄭重に待遇した。そして案の如く、

「何事の御祈誓のために御参詣遊ばされました。」

と尋ねたので、徳大寺殿は、

「日頃望んでゐた大將を、他人に先越されて、其のための祈誓ぢや。」

と云つて置いた。一七日参籠して、神樂風俗催馬樂は云ふに及ばず、三度まで舞樂を奏して華々しいことであつた。さて、いよいよ歸京となつた、主立つた内侍十餘人は、船を仕立て、一日路を送つて來た。徳大寺殿は「餘り名残惜しいから」と、今日路、明日路と引つぱつて、遂に都まで連れ上つて、自邸に入れて様々に待遇した上、色々の品物など給はつた。

内侍どもは歸りがけに、

「遙々都まで上つたからには、我等が主たる平家のお邸へお伺ひをせずにはおかれまい。」

と打連れて西八條の御殿へ参上した。

清盛入道は意外の訪問を受けて、早速面會した。

「汝等は何事があつて一同上つて参つたのぢや。」

と尋ねた。内侍どもは、徳大寺殿の嚴島參詣の歸りを送つて名残を惜しまれ、一日路二日路とつひ都まで上つた顛末を、詳かに申上げた。

「徳大寺殿は、如何なる祈誓があつて參詣されたのであらう。」

「大將を他人に越されたから、其の爲の祈誓と仰せられました。」

此の時、清盛入道は、

「王城に靈驗あらたなる神社佛閣數多あらせられるを措置き、此淨海が崇め奉る嚴島まで遙々參詣されたのは、殊勝の至りぢや。左程まで切望ある上は。」
と大に點頭いたが、やがて嫡子重盛内大臣の左大將を辭させ、次男宗盛大納言の右大將を越えさせて、徳大寺殿を左大將に推薦したのである。如何にも賢い計であつた。

それにつけても、彼の成親の新大納言が、かやうな謀にも出でず、由ない陰謀を企て、我身も子孫も亡ぼしたのは、氣毒なものである。

山門滅亡

後白河法皇は、三井寺の公顯僧正を御師範となされ、眞言の秘法をお學びになつてゐたが、大日經、金剛頂經、蘇悉地經の三部の傳授も濟んで、治承二年九月四日、三井寺に於て御灌頂を受けさせらるゝといふことになつた。

これを聞いた比叡山の衆僧は、大に憤り、

「昔より御灌頂御受戒は、皆當山に於て受けさせらるゝが先規である。然るに此度三井寺に於て受けさせられるやうならば、彼の寺を焼拂つてしまふ。」

と騒ぎ出したので、法皇は三井寺で御灌頂といふことはお見合せになり、御加行御結願といふ御修行だけに止めさせられたが、其のまゝになされるのも御不本意に思召めされ、公顯僧正を召連れて、天王寺へ御幸あらせられ、五智光院を建て、龜井の水を五瓶の智水と定め、此の水を用ゐて、佛法最初の靈地たる此の寺に於て御灌頂を遂げさせられた。

かうして、法皇には、比叡山の騒動を鎮めようとなされたけれども、山上に於ては、堂衆と學生との間に不和が起つて、度々合戦に及び、其の都度學生の負となつてゐた。山門の滅亡、朝家の御大事と見えて來た。學生といふのは、制規に従ひ

僧となつて學問修行を勤めるのであるが、堂衆といふのは學生附きの稚兒等が成長の後僧となつたのや、全く雜役に使はれる坊主共や、其外亡命無頼の徒が世間の制裁を免るゝ、自安の計として名ばかりの出家をした輩どもであつた。彼等は金剛壽院の座主覺尋權僧正時代に、夏衆と云つて佛に花を捧げた事などもあつたが、近年に至り段々増長して大衆を何とも思はなくなつて、之に抗敵し度度の合戦に打勝つたのである。そこで大衆は制馭がつかなくなつたので、此等師主の命を背いて謀叛を企つる者共は速かに誅罰せられたいと朝廷に願ひ出で、武家へも訴へた。

法皇は、堂衆討伐の院宣を清盛入道に下された。清盛は、紀伊國の住人湯淺權守宗重以下畿内の兵二千餘人を、大衆に應援させて堂衆を攻撃した。

堂衆は平素東陽坊にゐたのであるが、これを聞いて近江國三箇庄に下つて軍勢を募り、再び登山して早尾坂に城を築いて立籠つた。

九月二十日の朝、大衆三千人、官軍二千餘人、都合五千餘人、早尾坂に押寄せて、ごつと関を作つた。待ち構へた堂衆は、城内より石弓を弛して打落した。大衆官

軍の死傷者忽ちに山をなした。これに怕氣がついて、大衆は官軍を先に立てようとし、官軍は大衆を先に立てようとし、心々になつて、勇戦する者はなくなつた。堂衆に一味の者共は、山賊海賊強盜竊盜などの命知らずである、皆思切つて戦ふので、ごう／＼又もや大衆方の敗北となつてしまつた。

其後、比叡山はいよ／＼荒れ果てた。十二禪衆の外には足を停むる僧侶も稀になり、修學の窓は閉ぢられ、坐禪の床には人の影すらない。末代となれば、何の國の佛法も衰へるものと見えて、天竺の佛跡では竹林精舎も給孤獨園も此の頃は狐狼の栖居となり、支那では、天台山、五臺寺なども今は住侶もなく、大小乗の經卷も箱の底に朽ち、又我邦でも、奈良の七大寺も荒れはて、しまつてゐる。三百餘年さしも繁昌した天台の佛法も亦治承の今日に亡びるのかと、心ある人は歎き合つた。

何者の所爲か、空屋になつた僧坊の柱に、

「祈りこし 我立つ柚の 引替へて
人なき嶺を 荒れや果てなん」

といふ一首の歌を書いたものがあつた。是は昔傳教大師が當山草創の際阿耨多羅三藐三菩提の佛達に祈つた時の、
 「あのくたら三藐三菩提の佛達我立つ袖に冥加あらせ給へ」
 の歌を思出して詠んだものと思はれた。

善光寺炎上

其頃信濃國の善光寺が焼けた。同寺本尊の佛は昔中天竺舍衛國に耳口眼鼻頭の五種の惡病が流行して人民僧侶が數限りもなく死んだ時月蓋長者が龍宮城から閻浮提金を取寄せて鑄造した一寸八分の阿彌陀如來三國無双の靈像であるが佛滅の後天竺に留まること五百餘年にして百濟國に移り一千年の後百濟の齊明王即ち我が欽明天皇の御時日本に渡り攝津國難波の浦の水底に在つて常に金色の光を放ちたまふ。其より數百年を経て後信濃國の住人本田の善光が引上げ奉り晝は善光如來を負ひ夜は善光如來に負はれて信濃國へ下り水内郡に安置し奉つた其以來初めての火事である。

斯くも靈寺靈山の引續いて亡びたのは佛法衰へ王法も亦廢れる前表ではな
 いかど不安の念を抱くものもあつた。

康頼祝詞

さて薩摩瀧の鬼界が島に流された丹波少將俊寛僧都平判官康頼の三人は丹波少將の眞宰相教盛の領地たる肥前國鹿瀬庄から衣食を送られて辛くも命を
 永らへてゐた。

康頼は島流しの途中周防國室積で出家して法名を性照と命けてゐた。元か
 ら出家の志望があつたのでこんな歌を詠んだ。

「終にかく 背きはてける 世の中を
 疾く捨てざりし ことぞ悔しき」

この康頼入道と丹波少將とは熊野權現の信心者であつたから何うかして島
 内に熊野三所權現(本宮新宮那)を勸請し奉つて歸洛の事を祈らうと云ふのを性
 來不信心者の俊寛は同意を爲ない。あとの二人は若しか島の中に熊野に似た

所^{ところ}がありはせぬかと、毎日尋ねまはつた。丁度一ヶ所佳^よいところが見つかつた。南^{みなみ}は漫々たる大海北^{たいかい}は峨々たる山岳瀧^{さんごく}まであつて、那智^{なち}や熊野^{くまの}あたりの景色にさもよく似てゐた。そこで本宮^{ほんみや}だの新宮^{しんみや}だの色々の名を振り當て、日毎に熊野詣^{のまうご}の真似^{まね}をして、歸京^{ききやう}の願^{ねがひ}を掛けた。

「南無^{なむ}權現^{ごんげん}金剛^{こんごう}童子^{どうじ}願^{ねがひ}はくば憐^{あはれ}みを垂^たれさせ給へ、我等^{われら}を今一度^{いまさか}故郷^{こきやう}へ歸させ給うて、妻子^{さいし}をも見せしめ給へ。」

なご、祈^{いの}つてゐた。

康頼^{やすらひ}入道^{にちだう}が三所權現^{さんしょごんげん}の御前^{のみまへ}に祝詞^{のりとま}を申すに、御幣紙^{ごへいし}もないので、花^{はな}を手折^{たを}つて捧^たげつゝ、日々申してゐた祝詞^{のりとま}は斯^かうである。

維當^{あたれる}歳^{とし}次^{つぎ}治承^{ちじやう}元年^{げんねん}丁酉^{ていゆう}月^{つき}竝^{なら}十月^{じゅうがつ}二日^{にち}、日數^{ひかず}三百五十餘^{さんびゅうじゆ}ヶ日^{にち}吉日^{きちつ}良辰^{りやうしん}を撰^{えら}んで、掛^かけまくも忝^{かたじけな}き日本^{にっぽん}第一^{だいいち}大靈^{だいりやう}驗^{げん}熊野^{くまの}三所權現^{さんしょごんげん}、飛龍^{ひりゆう}大薩^{だいさつ}埵^たの教令^{けつりやう}、宇豆^{うづ}の廣前^{ひろまへ}にして、信心^{しんしん}の大施^{だいせ}主^{しゆ}羽林^{うりん}藤原^{ふじはら}成經^{なりつね}、并^{なら}びに沙彌^{しゃみ}性照^{しやうしやう}、一心^{しんしつ}清淨^{しやうじやう}の誠^{まこと}を致^{いた}し、三業^{さんごう}相應^{おうしやう}の志^しを抽^ひんで、謹^{こま}んで以^{もつ}て敬^{うやま}ひ白^ます。夫^それ證誠^{しやうじやう}大菩薩^{だいぼさつ}、濟度^{さいど}苦海^{くかい}の教主^{けつしゆ}、三身^{さんしん}圓滿^{まんまん}の覺王^{かくわう}也。或^{あるひ}は東方^{とうほう}淨瑠璃^{じやうるり}醫王^{いわう}の主^{しゆ}、衆病^{しゆじやうびやう}悉除^{しつじゆ}の如來^{にやらい}也。或^{あるひ}は南方^{なんぽう}補陀^{ふた}

落能^{らくのう}化^けの主^{しゆ}、入重^{にちじゆう}玄門^{げんもん}の大士^{だいし}、若^し王子^{わうじ}娑婆^{しあは}世界^{せかい}の本主^{ほんしゆ}、施無^{せむ}畏^ゐ者^{しや}の大士^{だいし}、頂上^{ていじやう}の佛^{ぶつ}面^{めん}を現^{げん}じて、衆生^{しゆうじやう}の所願^{しよごん}を満^みたしめたり。是^{こゝ}に依^よつて上^{かみ}一人^{ひとり}より下^{しも}萬民^{まんみん}に至^{いた}るまで、或^{あるひ}は現世^{げんせい}安穩^{あんゑん}の爲^{ため}め、或^{あるひ}は後生^{ごじやう}善所^{ぜんじよ}の爲^{ため}め、朝^{あした}には淨水^{じやうすい}を結^{むす}んで煩惱^{ぼんごう}の垢^{あか}を雪^{ゆき}ぎ、夕^{ゆふ}には深山^{しんざん}に向^{むか}つて寶號^{ほうごう}を唱^なふるに感應^{かんとん}解^げることなし。峨々^{がが}たる嶺^{みね}の高^{たか}きをば神德^{しんとく}の高^{たか}きに喩^{たと}へ、嶮々^{けんけん}たる谷^{たに}の深^{ふか}きをば、弘誓^{くわうせい}の深^{ふか}きに準^{なら}へて、雲^{くも}を分^わきて登^{のぼ}り、露^{つゆ}を凌^{しの}いで下^{くだ}る。爰^{こゝ}に利益^{りやく}の地^ちを憑^{たの}ますんば、争^いでか歩^{あゆ}を嶮^{けん}難^{なん}の路^ちに運^はびん、權現^{ごんげん}の德^{とく}を仰^{あや}がすんば、何^{なん}ぞ必^{かな}しも幽遠^{ゆうゑん}の境^{さかひ}に在^あさんや。仍^{なほ}て證誠^{しやうじやう}權現^{ごんげん}、飛龍^{ひりゆう}大薩^{だいさつ}埵^た、各^{おの}々^{おの}青蓮^{せいれん}慈悲^{じひ}の眸^{まゆ}を相^{あひ}並^{なら}べ、佐^さ小鹿^{こしか}、御耳^{ごみみ}を振^ふ立て、我等^{われら}が無^む二^にの丹誠^{たんせい}を知^し見^みして、一^{ひと}々の懇志^{こんし}を納^な受^うし給^{たま}へ。然^{しか}れば、則^{すなは}ち結^{むす}ぶ早玉^{はやたま}の兩^{りやう}所^{しよ}權現^{ごんげん}機^きに隨^{したが}つて、或^{あるひ}は有緣^{うゑん}の衆生^{しゆうじやう}を導^{みち}き、或^{あるひ}は無緣^{むゑん}の群類^{ぐんるい}を救^{すく}んが爲^{ため}めに、七寶^{しちほう}莊嚴^{じやうげん}の栴^{せん}を捨^すて、八萬^{はつまん}四^し千^{せん}の光^{ひかり}を和^{やは}らげ、六道^{りくだう}三^{さん}有^うの塵^{ちん}に同^{どう}じ給^{たま}へり。故^{ゆゑ}に定業^{ぢやうごう}亦^{また}能^よ轉^{てん}、求^{もと}長壽^{ちやうじゆう}得^{とく}長壽^{ちやうじゆう}、禮^{らい}拜^{はい}袖^{そで}を連^{つら}ね、幣帛^{へいおく}禮^{らい}奠^{けん}を捧^たぐるに、忍^{にん}辱^{じやく}の衣^{ころも}を重^{かさ}ね、覺道^{かくだう}の花^{はな}を捧^たげて、神殿^{しんでん}の床^{ゆか}を動^{うご}かし、信心^{しんしん}の水^{みづ}を清^{すま}して、利生^{りしやう}の池^{いけ}を湛^たへたり。神明^{しんめい}納^な受^うし玉^{たま}は、所願^{しよごん}何^{なん}ぞ成就^{じやうじゆ}せざらん。仰^{あや}ぎ願^{ねが}はくは十

二所權現各利生の翅を竝べ遙かに苦海の空に翔り左遷の愁を歇め速かに歸洛の本懐を遂げしめ給へ。再拜。」

卒都婆流し

丹波少將と康頼入道とは時としては三所權現の前で通夜することもあつた。ある夜二人は例の如く參詣して終夜今様を歌つたり舞を舞つたりしてゐたが、曉方になりて草疲れて神前に假睡をしてしまつた。すると沖の方より白帆を掛けた小舟が一艘汀へ消ぎ寄せ舟の中から紅の袴を著けた三十人ばかりの女官が渚にあがつて鼓を打ち聲を揃へて、

「萬の佛の願よりも

千手の誓ぞ頼母しき

枯れたる草木も忽ちに

花咲き實なるところ聞け。」

と繰返し三度唱つて、掻消すやうに無くなつた。かう云ふ夢を正々として

人とも見たのである。

康頼入道は夢から覺めて、

「如何にも是は龍神の化現と覺えられる。熊野三所權現の内、西の御前と申すのは本地千手觀音にして龍神は其の千手觀音の二十八部衆の一つで在らせらるれば我々の祈願を納受ましゝた夢の御告と思はれる。」

と云つて二人とも大いに喜んだ。

又ある夜のことやはり通夜をしてゐると夢に沖から吹いて來る風が木の葉を二枚二人が袂に吹き懸けた。二人はその木の葉を取上げて見るとそれは熊野の梅の葉であつた、二枚ともに蝕んでゐるのを辿つて讀むと、

「ちはやふる 神に祈の 繁ければ

なごか都へ 歸らざるべし」

同じ一首の歌がありゝと讀まれるのであつた。

康頼入道は餘り故郷の戀しさに切めても幾本の卒都婆を作り梵字の阿の字、年號月日、假名實名を彫りつけ、それに、

卒都婆流し

薩摩瀨

澳の小島に

我ありと

親には告げよ 八重の汐風。

「思ひやれ

しばしと思ふ

旅だにも

なほ古里は 戀しきものを。」

この二首の歌を刻み添へて海岸へ持て出て、

『南無歸命頂禮梵天帝釋四天王堅牢地神王城の鎮守諸大明神別しては熊野の權現安藝の嚴島の大明神切めては一本なりとも都へ傳へ給へ。』

と念じつゝ、白浪の寄せては返す度毎に一本づゝ海へ流した。

かうして毎日造つては彫り彫つては流す卒都婆の数が千本に満つた。其の千本の卒都婆の内一本が安藝國嚴島神社の前の渚に打上げられた。

康頼入道の親屬に一人の僧があつた。若し便船もあらば鬼界が島へ渡つて入道を訪ねたいものと西國修行に出掛けて先づ嚴島へ參詣をした。

其處へ狩衣装束した一人の神官が出て來たので何かと物語をした末、嚴島大明神は如何なるゆゑに海に御縁があらせまするか」と訊ねると神官はそれ

は此神が沙羯羅龍王の第三の姫君であらせられるから海に縁故の深いことや此の島に鎮座ありて以來さまゝ奇特な靈驗の實例など語つて聞かせた。

僧はこれを聞いて信仰の心を高め社前に蹲いて靜かに祈誓を凝らした。其の中に日が暮れて海の上から月が上つた。

満潮がひたゝと社殿の前へ満つて來た。沖の方から揺られゝて寄つて來た藻屑の中に一本の卒都婆があつた。僧は何心なく取上げて見たそれは康頼入道が鬼界が島から流した千本の卒都婆の中の本で彫刻んだ姓名も梵字

も歌も鮮かに讀まれるのであつた。僧は驚き喜んでその卒都婆を笈に差して都へ歸り紫野に住んでゐた康頼入道の老母妻子に贈つた。

この事が法皇の御聞に入り其の卒都婆を取寄せ御覽あらせられて、

「あゝこの者どもはまだ無事であつたか。」と憐ませられた。それから更に小松内大臣へ遣はされると内大臣は父入道の許へ持參に及んだ。見る人々を感せしむるのは實に和歌の徳である。

蘇武

清盛入道も岩木ではないつくつくと此の卒都婆を見て、
「愍然なものぢや。」

と云つた。入道さへ斯ういふくらむだから都の人々は老いも若いも貴賤上下の隔てなく鬼界が島の流人の歌だと云つて康頼入道の此の二首の歌を口號まぬものはなかつた。

千本までも作つた卒都婆であるから何れ形も小さかつたであらうに鬼界が島から遙々流れついて都までも二首の歌を傳へたといふのは誠に不思議なことである。

思ひ詰めて爲たことには昔も斯様な驗がある。昔し漢王が蒙古を攻めた時初め李少卿を大將軍に任じて三十萬騎を差向けたが散々敵に打負かされ大將軍李少卿は遂に生擒られて了つた。漢王は更に五十萬騎を差向け蘇武を大將軍に任じたが又々大敗軍となつて蘇武を初め六千餘騎が生擒られた。敵は蘇

武以下主だつた兵六百三十餘人の片足を斬つて追放した。即死するものもあれば程經て死ぬるものもあつたが蘇武だけは死ななかつた。李少卿は敵に仕へて榮華に暮したけれども蘇武は降伏を肯じなかつた。残つた片足でゐざりあるいて山に登つては木の實を拾つて食べたり里に下つては根芹を摘んで食べたりして生きてゐた。その間十九年に及んだ。後には田面に下りる雁までが蘇武に馴れるやうになつた。

ある時蘇武はこの雁共は皆我が故郷へ通つて行くのだと懐しく思ふあまり一書を認め「必ずこれを漢王へ差上げて呉れ」と云ひ含め一羽の雁の翅に結びつけて放した。

漢の都の上林苑にある日漢王の御遊があつた。日が傾いて夕ぐれの間何となく物哀れに思はるゝ頃一行の雁が北の空から渡つて來た。其中の一羽が舞ひさがつて翅に結び付けられてあつた一書を喰切つて地上に落した。役人が之れを拾上げて漢王へ差出した。不思議なことだと披いて御覽あると、

「昔は巖窟の洞に籠められて三春の愁難を送り今は曠田の畝に捨てられて胡

秋の一足となれり。縦ひ骸は胡の地に散らすとも、魂は二度君邊に仕へん。」と書いてあつた。それからして手紙のことを雁書又は雁札と云ふことになつたのである。

漢王はこの書を見て其の忠義に感じ、

「あゝ無慚、蘇武はまだ生きてゐるぞ。」

直に李廣を大將軍として百萬騎を差向けた。此度は漢の軍が強くて十分に勝を得た。それを聞いた蘇武は野中からゐざり、漢軍の陣營に行つて、自分は古の將軍蘇武であると名乗つた。

片足を斬られながら十九年の間敵地に苦みて尙ほ忠義の心たゆまなかつた。蘇武は輿に昇かれて十九年目に故郷へ歸つた。出征の初に王より賜はつた旗は寸時も肌身を離さず持つてゐたので、それを取出して漢王の見参に入れると君臣共に其の苦節を感嘆して、功に依つて高官に任せられ、數多の領地を賜はつた。

李少卿も漢朝へ歸りたいと思つては居たが、蒙古の王が無理に引留るので歸

られなかつたのであつた。漢王は李少卿が歸國せぬのを不忠だと云つて、李少

卿の亡父母の死骸を掘出して鞭打たせ、遠い親族までも悉く罰を加へた。

李少卿はこれを聞いて恨み悲しんだが、それでも尙ほ故郷が忘れられず、事情の已むを得ぬので、決して不忠の志しではないといふ次第を、一書に認めて、漢王へ呈上した。漢王はそれを見て、

「さては不忠のために歸國せぬのではなかつたか。不惑なことを致した。」

と父母の死骸を鞭打つたことを後悔したといふことである。

漢家の蘇武は書を雁の翅に結んで故國へ送り、本朝の康頼入道は波の便りに歌を故郷へ傳ふ。彼は一筆のすさみ、是は二首の歌、上代と末代、國は隔たり世は替つても、好くも似た珍らしいことである。





卷 第三



赦 文

治承二年正月一日後白河院の御所で年賀の儀式が行はれ四日高倉帝は院の御所へ行幸あらせられた。

この儀式は例年と何の變りのないことであるが去年の夏新大納言以下近習の人々が死罪流罪に處せられたことを法皇はまだお憤りあらせられて御政治も萬事不愉快に思召されるのであつた。

清盛入道も多田藏人行綱の密告以來法皇に對し奉り懷疑の目を注ぎ寸時も心の安まる暇はなかつた。
七日の夜東の空に彗星が現はれた。

赦 文

十八日には著しく彗星の光度が増した。

其頃まだ中宮であらせられた清盛入道の姫君建禮門院の御惱といふことが、忽ち世間に聞え渡つた。寺々では御平癒の讀經が始まり宮々には御祈願の官幣使が差遣はされた。

陰陽師は術を極め醫家は薬を盡した。けれども御惱は軽くならせられなかつた。

御懷妊と知れた。

主上は御年十八中宮は二十二歳。まだ皇子も姫宮もあらせられぬので若し皇子御誕生あらば如何に目出度からうと平家の人々は唯今にも皇子御誕生ある様に勇み悦び他家の人々は平家繁昌の折柄であるから皇子御誕生疑ひなしと云つてゐた。

清盛入道は中宮御懷妊と聞くや高僧貴僧に命じて大法秘法を修せしめ有らゆる神佛に願掛けて皇子の御誕生を祈つた。

六月一日中宮は御著帯を遊ばせられた。

仁和寺の守覺法親王は急ぎ御參内あつて孔雀經の法を以て御加持があり叡山の座主覺快法親王三井寺の住職圓慶法親王も御參内の上變成男子の法を修せられた。

中宮は月の重なるに随つて御苦しみが烈しく如何にも御痛はしく見えさせられる。色々の物の怪が憑いたといふので不動明王の法を以て何の物の怪が憑いてゐるかと訊した結果讚岐院の御霊を初め宇治悪左府頼長新大納言成親西光法師の死靈惡靈鬼界島の流人どもの生靈などが取入つてゐるのであるといふ事が分つた。

そこで死靈生靈を宥めようと先づ讚岐院に崇徳天皇と諡を奉り宇治の悪左府に太政大臣正一位を贈られた。

悪左府頼長の墓は元大和國添上郡河上村般若野にあつたのだが保元の秋に墓は露かれ死骸は道端に捨てられて墓の跡は一面の草原となつてゐた。

其處に勅使少内記維基が尋ねて行つて贈位贈官の宣命を讀み聞かせたのである。

門脇宰相教盛はこの事を聞いて、甥の小松内大臣重盛を訪ひ、

「今度中宮御産の御祈禱のため、御追號御贈位などの御沙汰様々に行はせられ

たが、何より非常の赦を行ふに越したる事はないと存する。中にも鬼界が島

の流人ごもを召還されたならば、最上の功德善根で御座らう。」

と申したので内大臣は西八條に行つて清盛入道に、

「丹波少將の事を門脇宰相の餘りに歎かるゝのが不感で御座ります。殊

に中宮の御惱は成親卿の死靈の祟りなごも申します。大納言の死靈を

お宥めなさるには生きてゐる少將を御召還しなされませ。人の願を叶へて

お遣はしになれば此方の御願も必ず成就して、御産平安王子御誕生の上家門

の榮華も彌盛んになるで御座りませう。」

と云ふと清盛入道も殊の外心和らぎ、

「俊寛や康頼法師は如何ぢや。」

「其も共に召還されませ。若し一人もお残しあつては罪で御座りませう。」

「少將と康頼はさうでもあるが、併し俊寛は赦されぬ。彼奴は此淨海が引立て

を以て人となつたる者ぢや、然るに所もあらうに、東山鹿谷に寄合つて、奇怪の

振舞をした奴ぢや。彼を許すことは思ひも寄らぬ。」

内大臣は伯父の宰相を邸に招き、

「少將は御赦免になりさうで御座ります、御安心なされませ。」

宰相は手を合せて喜んで、

「流されて行く時にも是式のごが何故申請の叶はぬかと思つたらしく、教盛

を見るたびに涙を流してゐたのが不感でならなかつた。」

「子といふものは誰しも可愛ゆいもの、尚よく／＼申しておきませう。」

いよく、鬼界が嶋の流人ごも赦免の事が決定した。上使丹左衛門尉基康は、

清盛入道の赦免状を携へて都を出發した。

宰相は餘りの嬉しさに、上使基康に自分の使者を添へて一緒に下した。

晝夜兼行で下れごの命令であつたけれど、浪風凌いで、海路のことごとく心に

任せず、都を七月下旬に立つて、漸く九月の廿日頃に鬼界が嶋へ到着した。

足摺

上使丹左衛門尉基康は急いで嶋に上陸して、

「都より流された平判官康頼人、道丹波少將殿は御座らぬか。」

一行聲々に呼びながら尋ねまはつた。俊寛だけが一人ゐて二人は例の熊野詣して居なかつた。

俊寛は此の聲を聞いて夢ではないか、天魔が吾をなぶるのではないかと思ひながらあわてふためき走りつ顛びつ基康の前行つて、

「私が先年流された俊寛で御座る。」

と名乗つたので基康は中間の頸に懸けさせてゐた袋から清盛入道の赦免状を取出して差出した。

俊寛は急いで開けて見ると、

「今度中宮御産の御祈に依つて非常の赦行はる。然る間鬼界嶋の流人少將成経康頼法師、赦免。」

二人の名だけが書いて俊寛の名前はなかつた。上包にはあるだらうと上包を見たが其にも書いてない。

俊寛は赦免状を奥より端へ端より奥へと読み返したが二人とばかりで三人とは書いてない。あわてわなないて、眼には涙が湧いて出る、もしや見そこなひかと、尚ほ幾度も読みかへすのであつた。

其處に成経、康頼の二人が歸つて来た。

成経が讀んで見ても、康頼が讀んで見ても、やはり俊寛の文字は見當らなかつた。其上二人に宛てゝは、都から幾通も書面が言傳てゝあつたけれど俊寛宛には見舞狀一通もなかつた。我が縁者はもう一人も都の内には居なくなつたのであらうかとも思ふのである。

俊寛は天を仰ぎ地に俯して、

「そも、我等三人は同じ罪で配所も同じ所であるに、二人は赦されて我一人だけが何故に赦されぬのか。平家の思ひ忘れか。執筆の謬りか。何とした事ぞ。」

泣き悲み果ては少將の袂に取絶つて、

「俊寛が斯様になり果てたのも、其許の父大納言殿の由ない謀叛からちや、餘所事に思ひなさるな。赦されずとならば、都までは叶はずとも、切めて此船に乘せて、日向、薩摩の地まで連行いて給はれ。二人が此處に居らるればこそ、時時には故郷の事も傳へ聞くことが出来たに、今より一人残つたら其も出来なくなるわい。」

と口説き立てられ、少將も涙含み、

「誠に御尤で御座る。我等二人が召還されるのは嬉しいが、お歎きの姿を見ては行くにも行かれぬ氣が致す、切めてお言葉通り此船にお乗せ申して参りたが、上使のお許しがない。赦されぬに三人ながら島を出たと知れては、又、お咎を蒙りませう。此上は、成經が先づ歸洛して、人々にも申合はせ、入道殿の氣色も伺ひ、改めて迎への者を遣はすやうに致します。それまでは今まで通りの心でお待ちなされ。縦ひ今度の赦免にはお漏れになつても、其内に赦免の御沙汰の無いことは御座りますまい。」

様々に言ひ慰めても、俊寛は堪忍ばれず、是から漕ぎ出さうとする船に乗つて見たり、下りて見たり、俄かに氣も狂うたかと思はれた。

少將は夜具、康頼は法華經一部を形見として俊寛に残した。

縦解いて船を押出せば、俊寛は其の纜に取付きながら、腰まで、脇まで、長の立つまで引かれて行き、長が及ばなくなつたところで船に取付き、

「どうでも是は俊寛をお見棄てなされるか。日頃の情をお忘れになつたのか。赦免がなければ、都までは叶はずとも、切めて九州の地までなりと。」

と頼むけれども、上使は許す筈もなく、取附く手を撥ね退けて、終に船を漕出した。

俊寛は是非もなく、渚に上つて泣き倒れ、乳母や母親を慕ふ子供のやうに足摺りしながら、

「乗せて行け、連れて行け！」

喚げど叫べど船は還らず、白浪ばかりを跡に残して沖へ、と漕いで行く。

俊寛は目も涙に掻き曇つて、まだ遠くは行かぬ船さへ見えなくなつて、小高き

丘へ駈け登つては沖の方をば招いた。彼の松浦佐依姫が大伴左提比古の船を慕つて山の上から領巾を振つた古事も思ひ出されて哀れであつた。

とうとう船も見えなくなり日も暮れた。俊寛は臥處へも歸らず波打際に濡れながら其夜を明かした。

少將は情の深い人だから、或は歸京して何とか取りなしてくれんことも有らうといふ念にひかされて思切つて身も投げなかつたのは、いよく哀れである。

御産の巻

丹波少將成経等一行は鬼界ヶ島を發し、日を経て肥前國鹿瀬庄へ著いた。宰相教盛は人を遣はして、

「年内は波が荒れて航海が困難であらうから、明けてからお上りあれ。」と云ふことであつたので、丹波少將は鹿瀬庄で新年を迎へることにした。

十一月十二日の未明より、中宮御産氣が附かせられたといふので、京中の者が其の事のみ語り合ふ御産所は中納言頼盛の六波羅池殿で、法皇も御幸あらせら

れた。關白殿を初め太政大臣以下の公卿達は勿論官職を帯びた人のかざり始ご一人も漏れなく伺候した。

是迄にも女御後の御産のときに臨んで大赦を行はせられた先例もある、今度も其の例に依り非常の大赦を行はれ重罪の者多く赦されたのに、彼の俊寛一人が漏れたといふのは宜しくなかつた。

御産平安、皇子御誕生ましまさば、八幡平野大原野などへ行啓あるべき由の御願立があつた。神社は伊勢太神宮を初め奉り、總て二十餘ヶ所に御産平安を祈り、佛寺は東大寺、興福寺外十六ヶ寺へ御誦經があつた。御誦經の使に立つ人達が平紋の狩衣に帯剣して、いろ／＼の御誦經物、御劍御衣を捧げ持ち、東の臺より南庭を渡つて西の中門に出て行く姿は、誠に美しい見物であつた。

中宮の兄君たる小松内大臣は何事に依らず騒がぬ沈着いた人であるから、外の人より遅れて嫡子少將維盛以下公達の車數輛續いて御衣四十領、銀劍七口を廣蓋に載せ、馬十二頭を曳かせて參られた。五條大納言國綱卿も馬二頭を進せられた。

尚ほ伊勢太神宮を初め奉り、安藝嚴島神社など七十餘ヶ所へ神馬を寄進し、宮中にも幣附けた寮の御馬數十頭引立てた。

仁和寺の御室守覺法親王は孔雀の法天台座主覺快法親王は七佛薬師の法、三井寺の住職圓慶法親王は金剛童子の法、其外五大虚空藏、六観音一字金輪五壇の法、六字加輪八字文珠普賢延命に至るまで、有らん限りの秘法を修せられた。護摩の煙は御所中に満ち鈴の音は雲に響き、修法の聲には身の毛もよだちて如何なる物怪といへども退散疑ひなしと見えた。

中宮は頻に御痛みはあらせられるけれども、なか／＼御産が難儀である。清盛入道及び奥方は胸に手を押し當て、おろ／＼として居る。人が物を尋ねても「好いやうに／＼」と云ふばかり、あゝ戦の場ならば是程に心配はせぬものを、後に言はれた程であつた。

御産者には房覺性運の兩僧正、春堯法印、豪禪實專の兩僧都、各僧伽の句をあげ、秘法を盡して祈りかけた。法皇は其時熊野御參詣の前で御精進中であらせられたが、中宮の錦帳近く御着座あつて、千手經を打上げ／＼遊ばされ、

「縦ひ如何なる物怪たりとも、この老法師が斯くてある上近付くことが相成らうや。殊に今現はるゝ所の怨靈は皆我朝恩を以て人となつた者共にてありながら、たごひ報謝の心は無くとも、争で障碍を爲すべきぞ速かに退散せよ」と叱して水晶の御珠數を押し揉みたまへば、安々と御産が濟んだのみならず、皇子であらせられた。

中宮亮重衡卿、御簾の中からつと立出で、

「御産平安、皇子御誕生。」

と高らかに申された。法皇御初め、關白太政大臣以下の公卿達、陰陽頭典薬頭、御産者等上下舉つてあつと揚げた喜びの聲は、門外までもごよめき渡つた。清盛は餘りの嬉しさに聲を立てて泣き出した。

小松内大臣は、金錢九十九文を皇子の御枕下に置き、

「天を以ては父とし、地を以ては母と定め給ふべし。御命は方士東方朔が齡を保ち、御心には天照大神入替らせ給へ。」

と念じ古い儀式に従つて、桑の弓に蓬の矢を番へて、天地四方を射た。

公卿揃へ

皇子の御乳母には、豫て前右大將宗盛卿の奥方をと定めてあつたけれど去る七月難産で歿くなられたので改めて大納言時忠卿の奥方を御乳となさせられた。後に帥典侍殿と呼ばれた方である。

法皇はやがて還御を仰出された。清盛は嬉しさの餘り黄金千兩富士綿二千兩を法皇へ進上した。

今度の御産について笑止の事が一二あつた。

恐多くも法皇が驗者をなされた事は一つ。次には后御産のとき御殿の棟から飯を落す例があつて、その落し方は皇子御誕生の時は南へ、皇女御誕生の時は北へ落すのである。然るに今度は皇子の御誕生であるのに、過つて北へ落し、狼狽へて更に南へ落し直されたが、ごうも縁起が好くないといふ者があつた。可笑しかつたのは清盛入道のあわて様、感心なのは重盛卿の舉動氣の毒であつたのは奥方の喪のため、宗盛卿が大納言大將の職を辭して引籠つたことであ

つた。

それから千度の御祓をする七人の陰陽師の中に、掃部頭時晴といふ老人がゐたが、一同と打連れだち多勢の中を押分けて祭壇へ近く時右の杵を踏み抜かれ、立停まる拍子に冠までも突落されて是非なく見苦しくも露頭のまゝ練り行いたのには、若い公卿殿上人など場所柄も忘れて、ごつごつ一度に噴飯した。

その外、其場では格別氣が付かずに、後で思合せた不思議が色々あつた。やがて御安産、皇子御誕生の祝賀の爲め、關白以下の公卿皆打揃うて六波羅御殿に伺候せられた。

大塔建立

中宮御安産に付いて御祈禱にたづさはつた寺々には厚い恩賞があり、僧侶たちも昇級其他種々の優遇を蒙つた。

中宮は御産後御平生に復せられて、六波羅池殿から宮中へお還りになつた。中宮の御腹に皇子御誕生ましませとは、清盛入道夫婦及び平家一門の希望で

あつて清盛入道夫婦は嚴島神社へ此の事を切に祈つてゐたのである。

元來平家一門が嚴島神社を信仰し始めたのは斯うである。

清盛入道がまだ安藝守時代に安藝の國の收入を以て高野山の大塔を修理したことがある。

遠藤六郎頼方が普請奉行を承はつて六年間に修理を終つた。

清盛は修理畢つて後高野へ上つて大塔を拜み奥の院へ參つた。その途中で

何處からともなく眉の白い老僧が現はれて何かと話をした末に、

「高野山は眞言宗に最も大切なお山である此度この大塔の修理が出来たは寔

に目出度い。其れに就いて越前の氣比の宮と安藝の嚴島とはやはり我が宗

に縁故の深い所であるに氣比の宮は榮えて居るけれども嚴島は見る影もな

く荒れ果てゝある。願はくは此次に奏聞して嚴島をも修理なされよ。さす

れば天下に肩を并ぶる人もない出世をなされうぞ。」

斯う言つて立ち去つたが其老僧の立つてゐた所には得も云はれぬ佳い香が

漂よふのである清盛は不思議な老僧と後を尾けさせて見たが三町ばかり行く

とふいご掻消すやうに姿が消えてしまつた。

「さては弘法大師であらせられたか。」

と清盛は尊敬の念に堪へず切めて此世の思出に高野の金堂に曼陀羅を殘さ

うものごと西曼陀羅は常明法印といふ繪師に書かせ東曼陀羅は自分で筆を取つ

た。何と思つてか其の内の大日如來の寶冠は頭の血を出して書いて置いた。

其後都へ上り此由を奉聞すると御感斜めならず尙ほ安藝守に再任を命せら

れ且つ嚴島をも修理せよとの勅命があつたので鳥居を立替へ社殿を造りかへ

百八十間の廻廊をも作つた。

此の修理が畢つて後清盛が嚴島へ參詣して通夜をしてゐると夢に尊げな美

しい天童が寶殿の戸を開いて現はれ、

「我は大明神の御使なり汝此劍を以て朝廷の守護者たるべし。」

と銀の蛭卷した小長刀を授けられた。

夢が覺めて見ると其の小長刀は枕邊に現存してゐた。其から又巫子に憑つ

て嚴島大明神は「曾て汝に老僧の告げしことは忘れずによりや但し悪行あら

ば榮華は一身に盡きて子孫に傳ふること能はざるべし」と告げさせられた。

頼豪

白河院御在位の時、京極の大殿(原師實)の姫君が后に立たせられ、賢子の中宮とて御寵愛が深かつた。

主上は此後の御腹に皇子の誕生を望ませられて、三井寺の僧で祈の上手と聞えてゐた頼豪阿闍梨を召させられ、

「汝此后に皇子誕生ある様祈り申せ。願成就の上は何事たりとも汝の望むことを叶へて遣はす。」

と仰せ下された。頼豪は畏まつて三井寺へ歸り、全力を盡して祈禱した。やがて中宮御懷妊あつて、承保元年十二月十六日皇子御安産あらせられた。

主上御感斜めならず、頼豪を召して、

「さて汝の望むことは何ぞ。」
と仰せられると、頼豪は三井寺に戒壇の建立を特許あらせられたき旨を願うた。戒壇といふは、比叡山にのみに許されてゐる僧徒の最も神聖とする受戒の

式場である。

主上は意外の御氣色で、

「僧正の位でも望むことかと思つたに、これは以ての外の所望ぞ。皇子誕生あつて位を繼がしめるも、天下の無事を思ふゆゑなるに、今汝の所望を聽すに於ては、叡山の大衆は憤つて世は静かならず、兩門合戦にも及べば、天台の佛法も亡びるに至らう。」

と遂にお許しにならなかつた。

頼豪は深く之を残念がつて、急いで三井寺に歸り、飲食を斷つて餓死を企てた。主上は之を聞いて驚かせられ、當時美作守であつた大江匡房に、

「汝は頼豪と師弟の間柄なれば、行つて何とか宥めて見よ。」

匡房卿は此の仰せを受けて、すぐに三井寺へ赴き、頼豪阿闍梨の宿坊を訪れたが、頼豪は燻つた持佛堂に立籠つたまゝ、内より恐しい聲を出して、

「綸言汗の如し、天子に戯れの言葉なし。戒壇建立の願ひ叶はぬ上からは、我が祈り出した皇子であるに依つて、取返して魔道へ連れて行くまでぢや。」

と遂に面會しなかつた。美作守はすさ／＼歸つて此趣を奏上した。主上は深く御歎息あらせられた。

間もなく頼豪は乾干になつて死んだ。

すると、日も経たず皇子は御惱とならせられた。様々の御祈禱を行はせられ、たけれど、何の甲斐もなく怪しい事には皇子の御枕頭に、錫杖を持つた白髪の老僧が断えず彷彿と立つてゐるのが、人々の夢に見え、あからさまにも見えたのである。

承暦元年八月六日、皇子敦文親王は御年四歳で遂に御薨れになつた。

主上はお歎きの餘り、比叡山の高僧西塔の座主良信大僧正(當時圓融)を宮中へ召させられ、如何にすべきかを御下問あらせられた。

「斯様の御願は我が天台の法力にてこそ成就すること、御座ります。冷泉天皇の皇子御誕生の御時も、九條師輔公が慈悲大僧正へ仰付けられたので御座りました。何も艱かし事では御座りませぬ。」

良信は斯う御答へ申上げ、直様山へ歸つて、百日間熱心に祈禱を行つた。其の

百日の内に、中宮は再び御懷姫あり、承暦三年七月九日に堀川天皇が御誕生になつた。

怨靈は昔も斯様に恐しいものであつた。此度平家の姫君たる中宮の御産に就いて折角大赦を行はせられながら、俊寛一人が漏れたのは遺憾なことであつた。

皇子は治承二年十二月八日、東宮に立たせられた。東宮職には小松内大臣重盛卿、池中納言頼盛卿などが任命せられた。

少將都還

肥前國鹿瀬庄で新年を迎へた丹波少將成經と、平判官康頼入道とは、治承三年正月下旬に肥前國鹿瀬庄を出發して上京の途に就いたが、餘寒も烈しく玄海の浪が荒れるため、海岸近く迂り曲り航海をしたので、二月の十日頃やつと備前の兒島に着いた。

其處からは、故大納言の配所であつた有木の別所も近いといふので、わざ／＼

尋ねて行つて見ると、竹の柱古障子などに書き残された筆の蹟があるのを見て、なつかしく、

「人の形見には、手跡に勝るものはない。お書き残しなされずは、争か之れが見られよう。」

と成経は康頼入道と二人讀んでは泣き泣いては讀むのであつた。

「安元三年七月廿日出家同廿六日信俊下向。」

なご、書いたのもあつた。さては源左衛門尉信俊が訪ねて参つたのであつたかと成経は思つた。

傍の壁には、

「三尊來迎便あり、九品往生疑ひなし。」

とも書いてあつた。これを讀んだ少將は、

「流石に欣求淨土の望もおはしたな。」

と悲しい中にも喜んだりした。

一簇の松林の中に土を小高く盛つた所がある。其處が新大納言の墓であつた。

た。

少將は袖搔き合せて、生きた人に云ふやうに、

「お逝れになつたことは、鬼界が鳥で風の便りに聞きました。が、儘ならぬ身の急いで参ることも叶はず、斯うして今日只今二年目に召還されました。父上御在世で御座りませうなら、如何ばかり嬉しく存じませうが、これでは折角生き長らへた甲斐も御座りませぬ。」

と泣いて搔き口説いた。苔の下で誰が答へよう、聞えるものはたゞ松風の音ばかりであつた。

その夜は康頼入道と二人墓の邊を繞り明かし、翌日は壇を築き假屋を作つて、七日七夜の間念佛を唱へ、經文を書き、結願には大きな卒都婆に、

「過去聖靈出離生死證大菩提。」

と認め、年號月日の下に孝子成経と書いて立てられたので、心なき山樵も子に勝る實はないと云つて、貴ひ泣をせぬものはなかつた。

やがて少將は、

「今暫く逗留して供養を致したいと考へまするが都の人々が待遠く思つて居りませうから、又參ることに致しませう。」

と、暇を告げて泣く／＼墓前を去つた。

二人は三月十六日鳥羽へ着いて、洲濱殿といふ故大納言の山莊に立寄つて見ると、家も庭も荒れはて、塀の上には屋根もなく、門はあれども扉は無い。庭に立ち入つて見れば、人跡絶えて、苔厚く、池には誰憚らず水鳥が群れ遊んで居る、家は戸障子も無くあからさまに柱ばかりが立つてゐる。あゝ彼處は父大納言の常も坐られたところ、おゝ、あの木は手づから植ゑられたのであるなご、見る物毎に昔が偲ばれるのである。今日は三月の十六日、花はまだ咲き残つてゐる、主はなくとも春は忘れぬと見える。

少將は花の下に立寄つて、

「桃李不言春幾暮、

煙霞無跡昔誰栖」

「故郷の 花のものいふ

世なりせば

いかに昔の 事を問はまし」

と古詩古歌を口號む。康頼入道も今昔の感に堪へず涙は墨染の袖を濡した。餘りに名残惜しくて、夜更るまでも去兼ねたが、乗物などの用意をして、迎ひに出でゐる人もあらうにと、涙ながら洲濱殿を立出でた。

さて、いよ／＼都に入るのである。少將の迎への者は車を持つて来てゐた康頼入道の迎への者も乗物を用意してゐたけれども、康頼は名残惜しさに、其には乗らず、七條河原までは少將の車に合乗りして行つた。

其より二人は名残を惜しみ合つて、別々の家に向つた、少將の車はやがて教盛の邸へ着いた。

靈山に住んでゐた母は、前の日から此の邸へ来て待つてゐたが、歸り着いた少將の顔を見て、命あればこそと云つて泣き伏した。

美しくて若かつた奥方は、二年此方の物思ひに其の人だとは思はれぬほど瘦せやつれてゐるし、黒かつた乳母六條が髪は眞白くなつてゐた。三歳で別れた若君は見ちがへるほど大きく成つて、髪も結ぶやうになつてゐた。

その傍に三歳ばかりの幼子が坐つてゐた。

「あれは？」

と少將が尋ねると、

「この方は。」

と云つて六條が泣き出したので、さては我が流される時臨月だと思つたが後で生れて無事に育つたのであつたかと彼の時のことを思出して涙がこぼれた。間もなく少將は舊の如く院の御所へ勤めて宰相中將まで進んだ。康頼入道は、一先づ東山雙林寺の山莊に自分の別莊があるのに落著いて、

「故郷の 軒の板間に 苦むして

思ひし程は 洩らぬ月かな」

こんな歌など詠んでゐたが、其儘其處を住家として昔の憂さ辛さの思出を、一巻の書に書き綴つた。寶物集といふのが其れである。

有王島下り

唯一人鬼界が島に取残された俊寛には、幼い頃から目を掛けて召使つた有王といふ僕があつた。

鬼界が島の罪人が大赦に遭うて歸京すると聞いた有王は喜び勇んで鳥羽まで迎へに行つたが、我が主人俊寛の姿が見えない。如何したわけかと尋ねると、彼は罪が重いから島に残されたといふことであつた。

有王は落膽して、それから時々六波羅邊に行つて様子を聞きつくろつて見たが、近々に俊寛赦免の日がありさうにも思はれなかつた。

有王は堪へきれず、ある日奈良に潜んでゐた俊寛の姫君を尋ねて行つて、
「楽しんで待つた甲斐もなく、遂にお歸りにはなりません。此上は何とかして鬼界が島へ渡つて、御様子を伺はうと存じます。玉章を頂戴して参りませう。」
姫は喜んで玉章を書いて渡した。

明さまに暇乞ひしては到底許されまいと、有王は父母には黙つて、三月の末に都を脱け出で薩摩の方へ向うた。

海陸數多の艱難を経て、やう／＼薩摩の國に著いた。薩摩から鬼界が島へ渡

る商人船が一艘あつた。これ幸ひと便乗を頼むと、人々は不審を起して有王を素裸にして調べたが、別に怪むべき點もなかつたので、便乗を許して呉れた。怪しまるべき姫の玉章は、髻の中に隠してゐたのである。

船は、日を経て、鬼界が島へ著いた。上陸して見ると、豫て聞いてゐたよりも、ごい處で、田も畑も村里もない。人は居るけれども、言葉も容易に通じない。有王は、手様手真似を雜せて、

「此島へ都から流された法勝寺の執行俊寛僧都といふ方は、如何なられたか、知つて居るものはないか。」

と尋ねた。島の者には、法勝寺だの執行だの僧都だのと、艱かしい寺名や官名など、解り様がない、皆首を振るばかりであつたが、其中の一人が斯う言つた。

「そんな様な人が此島に三人ゐたが、何んでも二人は都へ還され、一人は殘つて近頃まで、あちこち彷徨き廻つてゐた、今はどうなつたか、頼と見かけなくなつた。」

有王は直ちに俊寛の搜索に取掛つた。路も無いところを島の隅々まで歩る

きまはつたけれども、山の洞には雲が籠つて居るばかり、海邊の沙には千鳥鷗の足跡を見るばかりで、僧都らしい影も見當らないのである。

尋ねあぐんでも尙ほ怠らず、毎日尋ねまはつてゐたが、ある日、蜻蛉のやうに瘦せ衰へた者が、とぼとぼと磯邊を歩いてゐるのが見えた。髪の毛の伸び、鹽梅が、ぼう／＼として坊主の果てかと思はれた。片手には荒海布、片手には魚を提げて、着てゐる着物は、ぼろ／＼の絹か布か見分けもつかない。有王は都で随分様々の乞食も見つたことはあつたが、こんなひどいのにまだ出會つたことはなかつた。話に聞いた餓鬼其のまゝである。

有王は、まさかその人が俊寛僧都とは氣付かず、斯様な者でも萬一主人の事を知つては居まいかと考へて、

「ちよと物をお尋ね申す。」

「何ぢや。」

「此島へ都から流された法勝寺の執行俊寛僧都の御在所を、御存じは御座らぬか。」

俊寛は直ぐ有王と見て取つて、

「其は我ぢやよ。」

と言ひなり、荒海布も魚も投げ棄て、俊寛は砂の上に卒倒してしまつた。有王は驚いて、俊寛を抱き起し、

「遙々これまで尋ねて参りましたが、情ない。」

とおろ／＼泣きながら、様々に介抱すれば、俊寛漸く人心地着いて、砂の上に坐り、とぎれ／＼に物語る。

「遙々の浪路を凌いで、好く此處まで尋ねて来て呉れた。辱ない。明けても暮れても都のことばかり案じて、戀ひしと思ふ者共をば夢にも見れば、幻にも立つことも多い體が弱つてもう夢と現の區別もつかなくなつてゐる。今汝が來たのも夢としか思はれぬ、若し夢ならば覺めた後を何う爲うぞ。」

「いや、お夢では御座りませぬ。現實で御座ります。さても／＼、好く、まあ、これで御存命がお出来なされたもので御座りまするな。」

「かうぢや、去年少將や判官入道と別れた時身を投げて死なうかと思つたこと

もあつたが、今一度都の音信を待てど、少將が氣安めにいつた言をもしやと頼みの綱にして命を惜しんだが、食べる物が無い。體の好いうちは山に登つて硫黄を取り、九州から商船の著くたびに食物と換へなごして暮して居たが、後には段々衰へて山へも登れず、今日のやうな晴れた日には、磯へ出て漁師共の手を摺り腰を折つて、聊かの魚を貰つたり、沙が干た時には、貝を拾ひ荒海布を取つて、やつと命を繋いでゐたのぢや。兎も角も我家に行かう。」

これでも我家をお持ちになるのかと、有王は不思議に思ひながら、俊寛を肩に懸け、指さす方へ行つて見ると、松林の中に、竹を柱とし、芦を桁にわたして、其の上に松葉を覆せてある。此處が元は法勝寺の寺務職八十餘ヶ所の領地を司どり、四五百人の家來眷屬に圍繞れて御座つた榮華の人の御住家かと、有王の胸は涙で一杯になつた。

俊寛も、もう夢でないことが確に分つたので、有王に向ひ、

「去年赦免の使者が來た時も、誰の書信もなかつたが、此度汝が來るにも言傳はなかつたか。」

涙に咽んでゐた有王は、良あつて、

「西八條へお出でになつた後で、役人どもが參つて御家財は沒收、御家來共は搦め捕つて御謀叛の次第を訊問致し、皆殺しに逢ひました。奥方は若君と御一緒に鞍馬の奥へ潜んで御在でになりました。時折り私がお伺ひ致しますると、いつも若君は、「有王よ、鬼界が島へ連れて行け」とおむつがりになりましたが、あその二月に重い疱疹をお患ひなされ、とうとお歿れになりました。奥方は重ね々々の御悲しみに御病氣が出て、三月二日、若君の跡を追うてあの世へお出になりました。姫君だけは、奈良の伯母君の許で御無事で御成長であらせられます。これが姫君のお文で御座ります。」

と髻の中から取出して渡す文を、俊寛急いで讀み下せば、今有王の云つた通り、のことが細々と書いてあつて、その端には、
「なごや三人流されてまします人の、二人は召還されて候に、何さて一人残されて今まで御上りも候はぬぞ。哀れ高きも卑きも女の身ほど言甲斐なきことは候はず、男の身にて候は、渡らせ給ふ島へも、なごか參らで候べき。この

童を御伴にて急ぎ上らせ給へ。」

と認めてあつた。俊寛は手紙を突き出して、
「これ見い有王、可哀相に、汝を供で急いで歸れと書いてあるぞ。えい、徳になる身なら、三年の春秋を、此の様な絶海の孤島で送らうか。最早十二歳にもなる筈ぢやに、これ程まで分別がなうては行く末が案じられる。」
と、吾身のことよりは、吾子のことを思ふ、誰しもかはらぬ親の情である。俊寛はしばし泣いてまた語りつゞける。

「それにつけても西八條へ引かれる時、幼い悴が「連れて行つて」と後追したのを、直に歸ると宥め賺して置いたのは、昨日のやうに思はれるに、早くも三年の月日が経つて、今は六歳になる筈、其も此世の人ではなくなつたか。妻にも子にも先立たれて、何の望みもない此身ぢや。姫の事だけは氣に懸るが、これは生身のことであれば、歎きながらも暮らすことが出来るであらう、此上生き長らへて汝に憂目を見せては相濟まぬ。」
其日から堅く斷食して、一心に南無阿彌陀佛と唱へてゐたが、有王が島に

著いてから二十三日目に、俊寛は歳三十七で息が絶えた。

有王は俊寛の死骸に取付き、

「後世のお供も致すべきで御座りまするが、姫君の御身上も氣にかゝり、又後世を弔ふ人も御座りませねば、暫く生き長らへて御菩提を弔ひませう。」

と思ふまゝ泣いた後庵に火を放け、俊寛の死骸を焼き清めて、白骨を拾ひ、頸に懸け、又商人船の來るを待つて薩摩へ歸り著き、やがて奈良へ上つて、細々と俊寛に面會の始より最後の事情を物語つて、島には硯も紙も得られず、返書も認められなかつたといふことや、是よりは如何にして菩提を弔はねばならぬといふ事などを話してゐると、姫は泣く／＼聞いて居たが、程なく尼となり、奈良の法華寺に籠つて父母の後世を弔うた。

有王は俊寛の遺骨を高野の奥の院に納めて、蓮華谷で僧となり、主人の菩提を弔ふため、諸國七道修業の途に上つた。

魘

治承三年五月十二日の午頃都に突然魘が吹き起つた。家も倒れ、人も死に、牛馬の類も數知れず殺された。門などは其のまゝ四五町十町も吹いて持つて行き、桁長押柱などは空に飛び散り、檜皮葺板などは木の葉のやうに舞ひ亂れた。たい事でない、何かの前兆だらうと、神祇官に占ひを仰付けられると、「是は百日の中に大臣に關した災難が起り、天下の重大事となり、引いては佛法王法共に衰へ兵亂の續發する前兆」と神祇官陰陽寮とも同じ様に判断を申上げた。

醫師問答

同じ夏の頃、小松内大臣は、熊野參詣を思ひ立つた。

熊野本宮證誠殿の御前に、内大臣は終夜祈念をこめて申さるゝには、

「親父入道相國の有様を見るに、惡逆無道にして、動もすれば君を惱まし奉る。

重盛長子として頼りに諫むる所あれども、力微にして父の心を動かすこと能はず、此に於て、重盛思へらくなまじひに朝に列して、世に浮沈せん事、良臣孝子の道に非らず。現世の名利を捨てて、來世の安樂を求めんには如かじ。但し

凡夫の薄智取捨に惑へり、南無權現金剛童子願はくは子孫繁榮絶えずして仕へて朝廷に交るべくんば、入道の悪心を和らげて、天下の安全を得させ給へ。若くは榮耀清盛の一代に止りて子孫恥を被るべくんば、速に重盛の命を縮め給へ。兩箇の求願、偏に神助を仰ぐ。」

すると、不思議にも燈籠の火のやうな物が、重盛の軀から出て、ばつと消えて失くなつた。之れを見認めた者も多かつたのであるが、恐しいことに思つて誰も内大臣に告げることをしなかつた。

重盛が熊野より歸京の途中、岩田川を渡つた時、夏の暑い最中であつたので、嫡子維盛は外の公達と共に、淨衣の下に薄色の衣を着て、水遊びをしたのである。水に濡れた淨衣が下著に映つて、喪服の色に見えた。

筑後守貞能が之れを見答めて、

「御淨衣が如何にも忌はしう見えます、お召替へあつては如何。」

と云ふ、内大臣は、「さては我が死の願が成就する前兆。」と思ひ、淨衣を召替へさせなかつた。そして其處より熊野へ使者をやつて、御禮の奉幣を立てた。貞

能初め供の者一同は、頗る不審を抱いたが、内大臣は敢て其の理由を説明はしなかつた。程なく此の公達等が喪服を着られることになつたのは不思議であつた。

内大臣は歸京後間もなく病氣に罹られた。權現が死の願を納れさせられたのだと思つて、重盛は療治も祈禱もさせなかつた。

其頃支那から渡つて來てゐる名醫があつた。當時福原の別邸にゐた清盛入道は、越中前司盛俊を小松殿へ遣はして、

「輕からぬ病氣の由であるが、唯今宋國より名醫が渡來して居る、幸の事である、彼を召して醫療を致したが宜しからう。」

と言はせた。内大臣は盛俊を病室に呼び入れ、

「醫療を致せどのお言葉承はつて難有存じますと申せ。併し盛俊承はれ。

延喜の帝は稀世の賢王であらせられたけれど、御治世中に異國の觀相者を都へ入れさせられたのは千慮の一失、未代までも我邦の恥と申傳へてある。まして重盛なんどの凡人が異國の醫師を王城へ召し入れては、國の辱ではない

か。漢の高祖が淮南の鯨布を討つた時、流矢に當つて疵を被つた。皇后呂氏良醫を召して診させたるころ、黄金五十斤を與へ給は、治療を施さんと申した。高祖は聞き入れず、戰場にて疵を被るは武運の盡きたる故なり、命は天にあり、扁鵲あるも何かせん、されど黄金を惜むに似て、快からずと、五十斤の黄金を醫師に與へて治療は受けなかつた。重盛苟も九卿に列し、三台に昇る、運命未だ盡きずば、醫療を加へずとも、病は自ら治するごきあるべく、若し定業の爲す所ならば、釋迦佛たりとも涅槃を示される、醫療何の力ありて命を延ぶることを得べき。若し彼の醫術に依つて快復致さば、我邦に良醫なきを證して面目を損し、醫術効顯なくば、彼を召しても何の甲斐があらうぞ。重盛國辱を思ひて、外醫の治療を受けぬ、此の趣をば父入道殿へ申上げい。」

盛俊は福原へ駈下り、委細を答申に及ぶと、清盛入道は、「さほどに國の恥を思ふ大臣は昔にも聞かぬ、重盛は日本に過ぎた大臣ぢや。如何さま此度は歿せられるであらう。」と急いで都へ上つた。

七月廿八日、内大臣は髪を剃つて、淨蓮と法名を命けられた、間もなく八月一日、心安らかに薨去せられた。齡は四十三歳であつた。

「如何に清盛入道が横紙を破られても、内大臣が様々申宥められるため、今日まで天下は無事に治まつたが、此の大臣の薨去後、天下は如何に成り行くことやら。」

と上下等しく歎き合つたが、唯前右大將宗盛卿の身内の者どもは、「今後は右大將殿の天下ぢや。」と悦び勇むのであつた。

無文沙汰

小松内大臣は未來の事を豫知する力があつたものか、薨去前の四月七日の夜、不思議な夢を見た。

ある濱路を、内大臣が歩いてゐると、道端に大きな鳥居があつた。「あれは何の鳥居か。」と問へば、「春日大明神の御鳥居で御坐ります。」と答へた。其處へ多勢の人が群集してゐた。其中に法師の首を刀の鋒に貫いて、高く差上げてゐる。

る者がある。大臣が「何者の首である。」と尋ねると、「これは平家太政入道殿の首で御座る。悪逆無道の振舞を怒らせられて、当社大明神の御討取りになつたもので御座る。」と答へると見て、夢は覺めた。

重盛は夢がさめて、「さては平家の運命も末路に近づいたか。」と涙を流してゐた。其時戸をほとりと打敲いて入つて来たのは妹尾太郎兼康であつた。

「此の深夜に何の用ぢや？」

「今夜餘りに不思議な夢を見ましたに依つて、急に參上致しまして御座ります。何卒お人拂ひを願ひまする。」

人拂ひの上兼康が物語つた不思議の夢は、今内大臣が見た夢と少しも違はぬのであつた。

翌朝内大臣は嫡子少將維盛を招き、

「親の口より言ふは嗚呼がましいが、汝は器量人ぢや。誰か少將に酒を獻げよ。酒の酌には筑後守貞能が罷出でた。内大臣先づ三獻して維盛に獻せば、維盛も受けて三獻する時、

「少將に引出物を持ち參れ。」

聲に應じて赤地の錦の袋に入れた太刀一口が持ち出された。維盛は、

「平家の嫡流に傳へられる重寶小烏丸に違ひない。」

と喜んで拜見をする。意外にも葬儀の時に用ふる黒塗の太刀であつた。

維盛の顔の色の變つたのを見て、重盛はハラ／＼と涙を落し、

「貞能が間違ではない、この太刀は父入道殿萬一の場合、重盛が佩してお供せうと存じたが、今は重盛、父入道殿に先立たうと思ふゆゑ、汝に取らせるのぢや。」

これ聞いた維盛は何といふべき言を知らず、たゞ涙をおさへて引退り、其日は出仕もせずに引籠つてゐた。

其後内大臣は、熊野詣をして、間もなく病みついて薨去されたので、實にもと思ひ合はされるのであつた。

燈籠

小松内大臣は深く佛法を信じ、曾て彌陀の四十八願に準へて、東山の麓に四十

八間の寺を建て、一間に一つづつ、都合四十八の燈籠を掛け、毎月十四十五の兩日、それに灯を點じて大念佛を催された。

其日は平家を初め、各家より二百八十八人の美人を集め、尼衆として一間に六人づつを配置し、一心不亂に念佛を唱へさせ、十五日の日中を結願として大念佛を行はせたのである。内大臣も大念佛の人数に加はつて西方に向ひ合掌して、『南無安養世界教主、彌陀善逝、三界六道の衆生を普く濟度し給へ。』と廻向をすれば、見る人聞く人、感涙を流し、佛法歸依の心を起さぬ者はなかつた。

それより内大臣を燈籠大臣といふことになつた。

金渡

又内大臣は我が後世を弔らはせるため、何等かの善根を施して置きたいと思つてゐたが、日本に如何様の大善根を施し置いて、も子孫相續いで我が後世を弔ふことは覺束ない。寧ろ他國に善根を施して我が後世を弔らはせようと、安元

の春の頃、九州より妙典といふ船頭を呼び上せ、竊かに黄金三千五百兩を渡して、『汝は大正直者と聞いて居るから申聞けることがある、先づ五百兩は汝に遣はす、残る三千兩を支那に持ち渡り、二千兩は支那の皇帝へ獻じて、育王山に寄進すべき田地の代とし、一千兩は育王山の僧に與へて、我が後世を弔はせるやう取計へ。』

と囑んだ。妙典は畏つて支那へ渡り、育王山の方丈佛照禪師に對面して、内大臣の志望を述べた。禪師は感嘆して一千兩を山内の僧侶に與へ、二千兩を皇帝に獻じて、委細奏聞に及ぶと、皇帝より五百町の田地を育王山へ寄進された。それで育王山では日本の大臣、平朝臣重盛公の冥福を祈る佛事が、今に續いてゐると云ふことである。

其後清盛入道は、内大臣に死に後れて心細くなつたものか、福原へ下つて閉籠つてのみ居られた。

法印問答

同じ十一月十七日(治承三年)の夜に大地震があつた。

陰陽頭安倍泰親、急ぎ宮中へ参つて、

「今夜の地震、占ひ申す所極めて重大事件の前兆にして、年をいへば此の年を出でず、月をいへば此の月を出でず、日をいへば此の日を出でざる切迫の凶事に御座りませう。」

と言つて涙を流したので、傳奏の人は色を失ひ、主上も殊の外驚かせられたが、「何を泰親が申すか、人騒がせの怪しからぬ事ぢや、天下に唯今何の變事が起るものぞ。」

と若い公卿達は笑つてゐたのである。併し此の泰親は晴明が五代の末天文の奥儀を窮め、占斷的確にして掌を指すが如く、未だ曾て間違つたことがなく、指神子とまでも云はれた人である。曾て雷火のために狩衣の袖を焼かれても、兎の毛で突いた程の怪我もしなかつた不思議な神通を得た人である。斯かる前代未聞の陰陽師の占に過があらうとも思はれなかつた。

此より僅か數日を経て、同月十四日、何を思ひ立つたものか、福原に閉門中の清

盛入道、俄かに數千騎の軍兵を率ゐて上京するさ聞えたので、都の人達は驚破大變と騒ぎ出した。

「入道の今度の上京は朝廷に敵對のためである。」

と評判する者もあつた。關白基房卿も内々聞き込んでゐたことがあつたので、急ぎ参内して、

「此度清盛の上京は、この基房を害せんがためかと存じます。如何なる憂目を見ることで御座りませうやら。」

と奏上した。主上には、

「其の憂目こそ、即ち朕が憂目ぞよ。」

と勿體なくも御落涙に及ばせられた。

翌十五日、清盛入道朝廷に敵對する事必定と聞えたので、法皇大に驚かせられ、故小納言信西の子靜憲法印を御使として、

「近年朝廷にも動搖あり、人民も亦不安を懐いてゐる、之に就いて深く叡慮を惱まし給へども、其方あればと萬事は頼みに思召さるゝ折柄、軍兵沙汰に及び剩

へ、朝家を恨み奉る由聞ゆるは何事にや。」

と西八條の入道邸に仰せ遣はされると、入道は親ら對面も爲す、法印は朝から夕方まで待たせられども何の挨拶も爲ないので、是非なく源大夫判官季貞を以て、勅諭の趣を申入れさせ、いざ退出に及ばんとする時、清盛入道は法印を呼び返して對面し、憤りを含んでいふ様。

「やあ法印坊淨海が申すところは僻事か能くお聞きあれ。先づ重盛が死去つたことに就いて此の淨海が胸中の悲嘆御推察下されい。保元以後打續いたる亂逆に就き、淨海は唯大計を立てしのみ、手を下し身を碎いて、宸襟を安じ奉つたは内府重盛、其の内府の中陰に、八幡に御幸御遊あらせられたは何事ぞ。唐土にも功臣の死に對しては世々の帝御嘆きあつて、或は親ら碑文を書かせられ、或は御遊を停めさせられた例もある。縦ひ重盛が忠誠は忘れさせ給ふとも、淨海が悲みを御憐みなくては相成らぬ。縦し又淨海が悲みを御憐みなくとも、内府が功勞は忘れさせ給ふべきにあらず。淨海父子とも寂慮に叶はざればこそ、此頃の御遊も催させられたのであらう、甚だ以て不面目に存する、是

れ一つ。次に子々孫々まで御變改あるまじき由の御約束にて賜された越前國をば、重盛死去の後直ちに召上げられしは何の過怠にや、是れ一つ。次に中納言に缺員ありし時、二位中將基道所望されしに依り、執成し度々に及びしも、御承引なく、關白の息基房の子師家を以て補せられしは、餘りに本意なし、是一つ。次に新大納言成親卿以下近習の面々、鹿谷に於て謀叛を企てしは、法皇御許容の上なる事明々白々、事新しく申すまでもなく、當家七代までは御思捨てさせ玉ふまじき事なるに、まして年七旬に及び、餘命幾くもなき此の淨海をば、滅ぼし給はんとは情なし。斯くては子孫相續いで、朝家に仕へ奉らんことも覺束なく、且つは老後に及び、さのみ心を費やす事も堪へ難く、覺悟を極めて上洛を思ひ立つたる次第、御推察あれ。」

と云ひつゝ、或は怒り或は泣く。法印は怖ろしくもあり、哀れにも覺えて、汗水になつて聞いてゐた。斯様な場合、淨海入道に對して、何人たりとも一言も言葉が返せるものでない、況んや己も亦鹿谷の寄合には、近習の一人として列席したる覺えがあるので、其の廉で召捕られはすまいかと薄氣味悪くも思つたが、性來